註解

夢のたゝゐ

中矢直之介著
榊原頼輔註

松雲堂發行

特232
72

始

特232
72

中矢直之介著作
榊原頼輔註解

註解

夢のたゝち

松雲堂發行

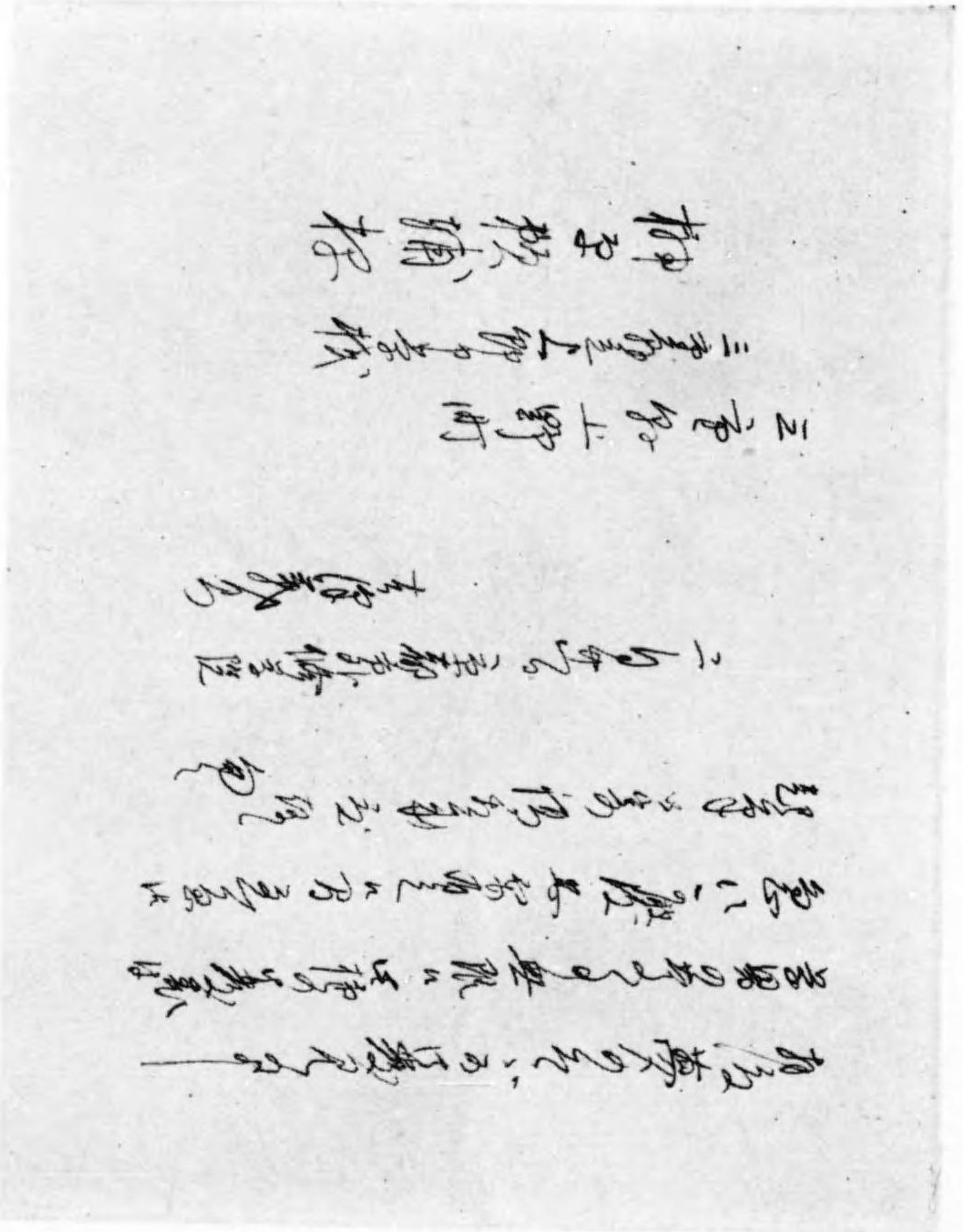
帝國圖書館藏
昭和三 … 内交 帝圖

拜復　夢のたゞか御發見のよし
學界の慶事無限候此種の御發表は
急に可被致必要有之候間至急御
起筆御寄稿相成度存候　匆々

二月廿八日　京都市外修學院

吉澤義則

三重縣上野町
三重縣立上野中學校
榊原頼輔様



拝啓　[illegible]御發見のよし
[illegible]の御發表に
[illegible]
[illegible]

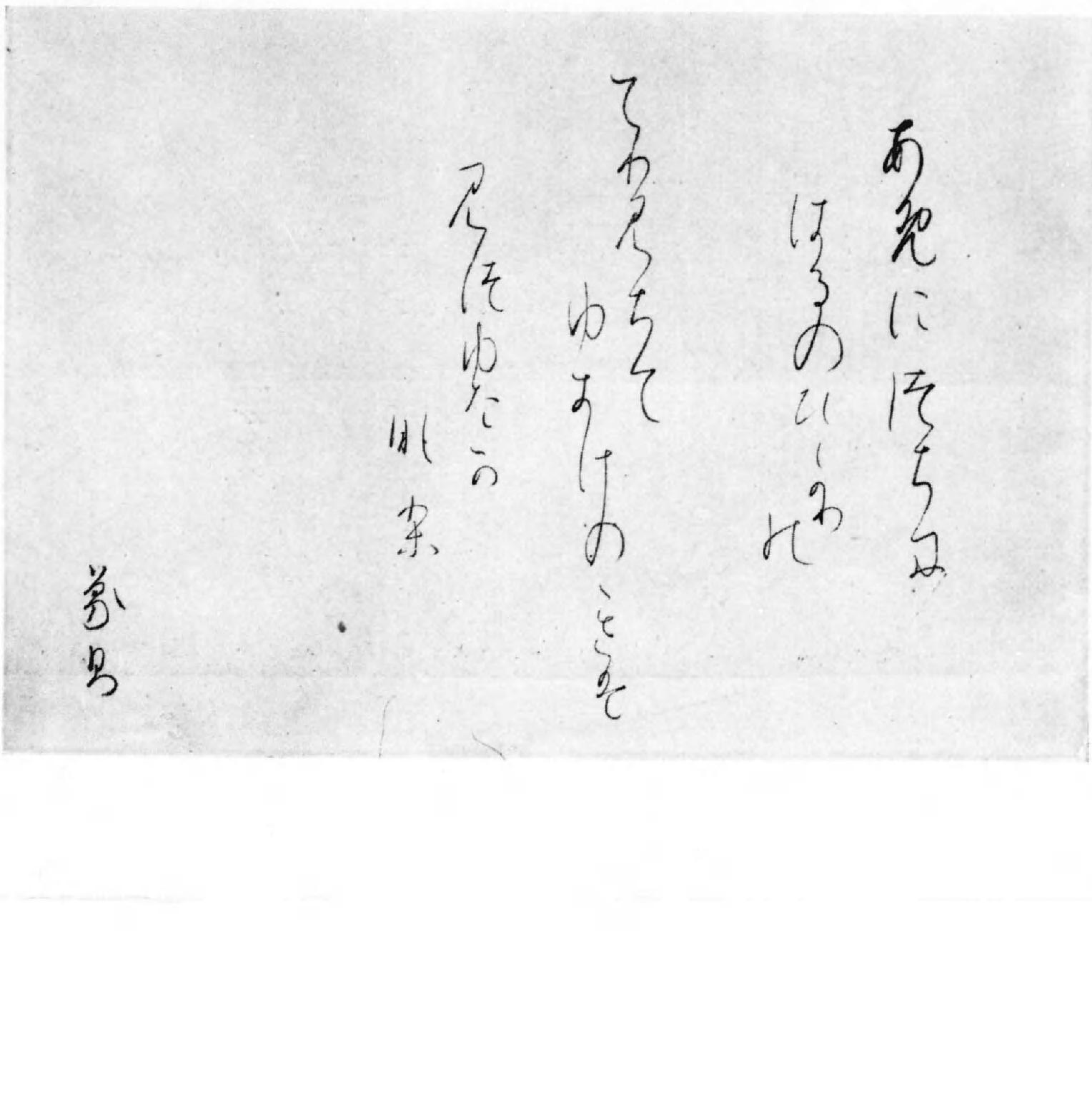
二月廿八日　京都市外等持院

[illegible]

三重縣立工業中學校
[illegible]

あめに　つちに
はるの　ひかり
の
てりみちて
ゆきげのゝざは
みづ　ゆたか
なり

義則



しかれと万代にかはらし住家へ皆ふちなら
ふたゝひすかたを見しにおのかみたつる其名
の梅の舎主君

たしかなるかをはしるへき年をたに
色香をは忘むうつりの下ゆは

鳥栄廼舎乃歌 并 文歌

行簡

梓弓春はまたきあは乃なよふ雪消ば
に待し朝まだき風をしみなきにせしよ
いつはり先立てにほはしく匂へるから人皆も
めでましをかしかるをしもめでその盛りに
言の葉を咲く花の花と句ひうたひ
詠ひつゝ数さはふ律捧しあめる文机
も家主ろせ君乃待朝まだきに薫る備ゑ然
窓の戸おれ内外盈たてるむつ清しれぬ友と
し那れて万代にかえし待乃へ然ふよゆら
にむすぶたえしにおの玉かる於へる其名
の梅の香の君

たしかにも加へはし来ぬ年をたに
色香をはあらむうめ乃下にほ

烏米廼舎の歌并反歌

行簡

梓弓、春さりくれば、あまきらふ、雪間を出でて、朝はふる、風をしのぎて、こと花に、いや先き立ちて、いちはやく、匂へるからに、人皆も、めぐしうつくし、かぐはしと、めでの盛りの、言の葉も、咲く花のごと、匂やかに、とりよろひつゝ、數さはに、つどひ來ぬれば、文机も、處せきまで、朝にけに、薫り滿つれば、窓の戸の、内外へだてず、むつまじく、友となれて、萬代に、かくし住まへば、ことさらに、おほすとなしに、おのづから、おへる其の名の、梅の舎の君。

はしきかも、かぐはしきかも、年のはに、色香そはなむ、うめの下いほ。

（上野町萬町澤家所藏）

海邊夕

ゆふ汐にくもる海べやかむや紙
蘆手に見ゆる岸のむら松

行簡

はしきかも、かぐはしきかも、年のはに、色香そはなむ、うめの下いほ。

（上野町萬町澤家所蔵）

海邊夕

ゆふ汐にくもる海べやかむや紙
蘆手に見ゆる岸のむら松　行簡

上くらに敷たる綾のむしふすま
つい居るちぬや何の幸そも　行簡

海邊夕

ゆふ汐にくもる海へやかむや紙
蘆手に見ゆる岸のむら松　行簡

上くらに敷たる綾のむしろすま
つい居るちぬや何の幸そも　行簡

もし何、がこ

九おむまさいともの、りへる

梅を見し去年、
はかなし

行簡

はる若様も借し給ひてうは
こ安しくなせかへしまゐらへ来
人両至つこしてまゐりてこさ
せらふらの故は使人を畑かし
る侍る事もいかにも罷ふかく
侍るこそよれこれとも申せ
こえ侍るなれかしこ
のもしきこうれしくも思ひ
給へらさ侍ふなる不かくも
いちもしまれてられこ申しけれ
おかしきまれ様よりなま様
まゐ様しれてまゐりけるか様て
十る律にし侍らむいてかしこ
れなむまさいとまのつかへる
やしてなふの両はなきし
れて侍らふわるこうちへてさ
るはふみら思ひ給へらむ
こうこしれなむ侍る様の紙
題様もいさまあらむ

おもしろくれ折りから御座候
きゝ候しれてまゐりけるが候て
ける体にし侍らず　ことかしこ
れおもむきをものしへる
やくなふの兩候しるし
れて侍らぬわるうちへと
る流ふみら思ひ給へくるが
こうさしれなむ侍る折り紙
題折すも　とあるなむきう
まゐらせ候　御待ち給りなむ
ちゝ程に願ひ申上
あなかしこ

六月四日

信綱

梅窓ぬし　御許へ
ほかにし

御器ども借し給はりてよろ
こばしくなむかへし奉るべき
人雨づゝみしてまうてこずさ
むらふもの故御使人を煩はし
はべるなむいとも〳〵罪ふかく
こそ侍ふなれかしこ

よべはよくこそとはせ
給ひてうれしくも思ひ
給へられ侍ふなるほか〳〵も
さはりなくてよろこばしく
なむされどよろづにたど
たどしくてまうけなども
得つくし侍らずいとかしこ
くなむまことやのたまへる
やうにけふの雨のおほゝし
くも侍らふなるふりはへた
る御ふみよ思ひ給へかけず
うれしくなむ侍る残りの
題どもはいとまあらむをり
によみいでて給はりなむ
ことをこそ願はしけれ
あなかしこ

廿日あまり四日の日

行簡

梅舎ぬし御許へ

御かへし

（上野町澤家所蔵）

目次

一、田中善助氏の書名揮毫
一、吉澤博士の手翰
一、吉澤博士の和歌
一、本書作者の長歌親筆及短歌親筆
一、同手翰親筆
一、例言
一、著者の略傳
一、本文
一、出版になるまでのあらまし

以上

例言

一、本書を發行するに方りては先づ第一に上野圖書館の檜森萬作氏の功勞を認めねばならぬ。何となれば同氏は余が上野圖書館へ行つた時余に本書の寫本を出して見せられた方である。若し同氏が無かつたならば夫れ或は余は『夢のたゞか』を研究しなかつたかも知れない。して見ればこの度の功勞は氏を第一とすべきである。次は京都帝國大學敎授吉澤義則博士の研究恩命を感泣し又上野町長兼上野圖書館長たる田中善助氏や、高畑淺次郎氏や、萬町の澤家などへも深甚なる謝意を表せねばならぬ。そは又何故かと云ふに是等の方々の親筆や歌詠や所藏行箇親筆をこの度本書の巻頭にかゝげる事の光榮を有し特に田中高畑兩氏には一閲を煩したからである。又村治圓次郎氏、菅野四郎氏、杉森萬之輔氏、佐々木彌四郎氏、木津碩堂氏、白井

雲厓氏、飛田翠雨氏、松浦宗一氏、入交幸雄氏、岡森榮眞氏、山内京氏、小泉旭潮氏、中山讃治中村忠一兩氏にも高庇を受けた。深く感謝の意を表するのである。

一、世の中に名家の文で人口に膾炙するものは澤山あるけれども、既に中等程度の國文讀本などに收載し古されて爛熟して興味が少ないものであるが、此の書は學界新發見の國文書として清新であり、且つ此頃の公刊本見たやうに何等いやらしい想といふものを加へてない許りか、又質に於ても氣障な點がない。故に近頃のやうに學生の道心德行往々にして社會の惡風潮に蕩かされて甚しく篤實を缺くかの憾ある際に方りては、特にこの種の書を諸學校國語科の副讀本として使用されることは極めて恰當の事と信ずるのである。且つ本書中には高等專門諸學校の入學試驗國語科問題に適したものも多々ありと認めるのである。

一、本文中讀み難き文字には特に假名を附したり、又は原文假名であるのを漢字にかき直したりしたのは實は讀解に便ならしめんためにしたのである。

一、注解は務めて平易を旨とした。こは初學者の理解を深からしめる一助ともならうかと思つてしたことで、大方博雅の士のためにしたのではない。

一、別記の如く行簡の事蹟資料蒐集については中々苦心したものである。今はその中につき要をつみて略傳と題して下にかゝげておいた。

一、次に本書の内容は作者が天保二年三月十三日に上野町を出發、
久米、淺宇田、古山、追分、藏持、名張、黑田、鹿高
を經て大和に入り、
千瀨、大野、山邊、三本松、萩原、西峠、角柄、けはひ坂
を過ぎ余喜天神に詣で木屋某の家に宿り、
十四日は長谷、出雲、黑崎、脇本、慈恩寺、かな屋、大御輪神社、三輪、櫻井、多

武の山麓、栗殿、幾十町の坂路、山東總門、勅使殿護國院、總社、山西總門、五十町下り坂、瀧の畑、千俣、上市、吉野山麓櫻の渡し、飯貝丹治、七回り坂、四手掛明神、山の尾の上、大橋の順路で進み同日は湯川屋といふへ一泊し、

十五日は藏王堂、吉水院、竹林院、布引櫻、世尊寺、三郎の鐘、水分神社、金の御嶽神社、蹶ぬけの塔、安寺、苔清水、西行庵、如意輪寺、藏王堂、實城寺、義照墓六田の里になを村等を巡りて越部の里に宿泊し、

十六日は土田、檜垣本、畑屋、赤尾、壺阪、清水谷、土佐町平田、見瀬御坊、大さじま、九品寺、田原本、八尾尻、八尾村、今里、王子、から子、喜幡、二階堂、藤川等の村々を通過し横田井殿に入りし頃同行者忠孝とはぐれて懊惱のうちに奈良に一泊、

翌十八日は宿を出でんとして偶然忠孝の通行を見つけて歡喜し、夫れより又打連れて奈良を見物し、急いで奈良坂を越え、このてがしはを過ぎ山城梅谷村、加茂、笠置、大川原より島ヶ原へ達し、三本松を通り、名張の親戚宅へ落ち着いたのは戌の時下る頃であつたといふ。その旅行記である。それを『夢のたゞか』といふのは巻頭の『かきつめて人にも見せむみよしのゝ花にまよへるゆめのたゞかを』といふ歌によつて命名したのである。吉野紀行文ならば本居宣長の『菅笠日記』を始めあまた、先人の作品があつて別に珍しい事もないけれども、こはまた文もめでたく中々にやさしき點も多かれば世には著はし出でて天下にも問うて見るやうにもなつたのである。伊賀は年代が古いからまだ〳〵先人未發の作品のかくれてゐるのが多からうと思ふ。

著者の略傳

著者藤原行簡は、本名を中矢直之介と云ひ、伊賀國上野町藤堂家の騎士隊長兼弓師助教を勤め、百廿石の扶持を受け、同町に住んで居た人である。同國長田村西蓮寺にある墓表の文によれば、行簡は寛政六年に生れ、天保十二年の四月十二日に歿して居り享年は四十有八歳であつた。その室は大乃木直正の女で萬延元年六月十九日に歿し墓表には清香院薫山妙山大姉と誌されてゐる。

今津市の勵精中學校に勤めて居らるゝ數學教授擔任の中矢四郎氏は其家の現主で、氏の養父の養父に當る人が即ち行簡であるとの事である。

其の作品及其の友人入交省齋の著櫻井茶話を透して見た所によると行簡は第一尊皇愛國の心が厚く次には、國語漢文の造詣が深く、又其友交に淳き人であつた。

著述には大日本史(未完)、野史鈔(四冊)、假寢夢(四冊)、行簡歌集(八ヶ年間毎日一首以上)其他數種がある。

註解 夢のただか

中矢直之介著作
榊原頼輔註解

か[1][3]きつめて人にも見せむ、み[2]よし野の花にまよへる夢のたゞかを。

ふるくさに新草交り、面白き野[4]をばやきそ・と古へ人の歌へるには、事かはりて上[5]れる世の手[6]振に、近き世の姿取り交へ、みやびたる鄙びたる、[7]わきためなく、ち[8]びたる文[9]手のゆ[10]くらゆ

一頁
①かきつめて　かき了りて
②みよし野　みは稱美の意の接頭語眞と通ず。
③かきつめての歌　みよし野の花に迷ふた夢そのまゝの有様即ち三吉野の花見に行つた旅行紀文を記し了りて之を人にも見せんさいふのである。
④面白き野をばなやきそふるくさににひくさまじりおひばおふるがに。（萬葉十四）

くら、拙き手して書きやりたる、見む人の思はむ程もやさし[1]かれど、さばれ[2]。
名細[3]の、櫻の花や匂ふらむ、いざ[4]みよし野の、吉野の山路分け[5]なむと、思ふどち[6]打連れて、天つ[7]御空も保らけき大御代の、二年といふ年の、彌生[8]の十[9]まり三日の日に、まだ夜[10]をこめて立いづる、折しも曇りにたりければ、
花[11]見にと出たつ今日の朝ぼらけ心にかゝる四方のむら雲。
かくてはいかにやあるらむと、空のみながめやりつゝ行く程、雲間もり出づる明[12]時月を見つけたる、いとめづらかにも嬉しくもありけるに、野[1]口のたゞよし、『ぬ[2]れつゝも行かむと思ふ旅の空に嬉しく月の現れにけり。』と言[3]擧げして久米の川邊を過ぎ、石橋渡り、淺宇田村なる八幡宮の御前を通り、大内里なる某の屋の前に植ゑたる藤の蔭いと暗きに、花やふ[4]ゝめると立より見て、忠よし、『藤[5]の花咲かぬを見れば三芳野の花は未だとも頼まれにけり。』
ふる山の里に至れる程に夜は明にたる。　空のけしき、雲[6]のたゝすまひ、今も降り出でぬべき樣なるに又、同じ人の、『花[7]見にと出で立つけさの

一頁
⑤あがれる世　甚だ古き世
⑥てぶり　手風。作風。
⑦わきため　區別。分ち。
⑧ちびたる　すりきれた。
⑨ふみで　文手。略して即ち筆。
⑩ゆくら〳〵　ゆく〳〵。らは接尾語。
二頁
①やさし　恥かし、
②さばれ　さもあらばあれ
③なぐはし　名細し。名美し。名ぐはしは吉野の枕詞。
④いざ　さあさ誘ふ時。又は心のすゝむ時に發する語、いささはちがふ、いさは必ず下に知らずといふ語がある。いさは副詞いざは感動詞。
⑤分けなむ　分けよう。
⑥思ふどち　思ふ同士。
⑦天つ御空云々　天保二年といふこさ。
⑧やよひ　三月。

二頁
⑨十まり三日　十三日。
⑩よをこめて　夜あけに先立ちて。
⑪花見にさ云　あさぼらけは夜明けの空のうすく明らんだこさ。夜明け。花見にさ出で立つけふの夜明に、天つみ空を打仰げば四方にむら雲のあるはまことに心にかゝるさいふのである。
⑫明時月　あかさき月明方の月。
三頁
①野口の忠よし　隨行者の一人。上野町天滿宮神主野口伊豫守。
②ぬれつゝもの歌　意明。
③言擧　特に言ふこさ。
④ふゝめる　花やつぼめるさ立寄り見たのである。
⑤藤の花の歌　大意は聞えてゐる。降るを古にかけたのである。
⑥雲のたゝすまひ　雲の容

曇り日にたのまれぬ名の古山の里』となり出でたる。うべ[1]花見には相應はしからぬ名にこそありけれ。

さ[2]もあらばあれ。

　ふ[3]りはへて雨にもたどれみよし野の山の櫻
　のまだ散らぬまに。

追分藏持なんどを過ぎ、名張の驛に到り著きてしるべのかた訪[4]らひ、用のこと何くれとと[5]りまかなひ、日[6]長けて後ぞ立ち出でぬる。名張川打橋渡り黑田村を通り、鹿高の川邊をすぐるに、櫻の花のひとき二木まさかりに匂ひたる、何よりも先づ目止りて、行先床しくぞおぼゆる。川面は、いともこゞ[1]しき岩かげに道つけたるにて、仰ぎ見れば、二丈ばかりの巖の、今も落ちかゝらむ程なるが峙ちあり、彼方の岸は、屛風なんど引[2]はえたらむ樣して、ゆ[3]ついはむらの重なりたるが中に、木ども生ひ茂りて、たぎ[4]ち流るゝ水の邊りには、岩柳てふ花の、泡雪なす咲き續き、桃、山吹も此處彼處に色映えて、見所あり。彼の人は口疾く、『鹿[5]高川川邊の櫻見初めてぞまだみよし野は賴みありけり。』『櫻[6]桃山吹躑蠋見るにつけ遲し早しといふが樂しさ。』なんど云ひ續けた

三頁
子。
⑦花見にさの歌　意明か。降るを古にかけた。

四頁
①うべ　宜にて尤であるとの意。
②さもあらばあれ　ふりはへて雨にもたどれと歌へつゞけて見る。
③ふりはへての歌　ふりはへては副詞振延へて、殊更に、わざ／＼の意。但し心の中には降りは經でと祈つてゐるが見える。大意はふる山とはうべ花見にはふさはしからぬ名であるが、さもあればあれ、みよしのゝ山のさくらのまだちらぬを見たさに、わざ／＼雨の中の山路を辿り／＼て行くといふのである。
④訪らひ　尋ねる。
⑤とりまかなひ　用意すること。

四頁
⑥日長けて　日高くなつて。

五頁
①こゞしき　けはしき。嶮はしき。
②引きはえたらむ　引き延ばしてあるやうな。
③ゆついはむら　五百箇磐群(いほついはむら)の謂で五百を切れば與であるけれど與と由とは殊に近く通ふ音である。多くの岩石の群がりてある所。
④たぎち流るゝ　逆卷いて流れる。
⑤鹿高川の歌　意明かである。
⑥櫻桃山吹の歌　大意明かである。

る。

我はさきのみ急かれて、
　まだき[1]より心に花をみよし野の山路にのみ
　ぞあこがれわたる。

此わたりには似つかずやあらむ。

たむけを越ゆれば大和國なり。

長瀨、大野、山邊、三本松、なんどいへるところ〲過ぎ行く程、よべより打守られし空のいよ〱黑みわたりて、小雨をり〱音づれなんどせしかど、雨衣[2]身に纏ふまでもなくて、萩原の驛に至りしは申過る[3]頃にやあらむ。ここに打休らふ程痛く降り出でて、今は堪えがたしとおの〱雨裝[1]とりつけて、西峠、角柄なんど打越え、けはひ坂より初瀨の寺や里やと見下したる、得[2]もいはぬけしきにて、鈴[3]の屋の翁があらぬ世界に來たらむ心地すといひおけるも實にとぞ思はる〵

『うつすとも繪にも及ばじ初瀨山たぐひながめのこれの見渡し。』『咲[4]殘る花にあはれはこ[5]もり〱の初瀨の山の雨の夕暮。』と忠孝がよみ出でたる。

今日の雨に此邊り物せし樣また云ふべくもあらねば、我は只、

---

①まだきよりの歌　人は途中の花などに心をよせてゐる樣であるが、我はまだきからみよし野の花を見に行くのには、何處から何處へ行つて夫から何うさ只もうその方への山路の詮義にのみ心せかれあくがれて一向外の事は心が向かずさいふのである。

②雨衣　雨合羽。雨を凌ぐに着る服。

③申過る頃　午後四時過。

①あまよそひ　雨衣さ同じあまじたく。雨中を行く裝ひ。

②得もいはぬけしき　云ひも得ざるよいけしき。

③鈴の屋の翁が云々　けはひ坂さて險しき坂を少し下ろ。此坂路より初瀨のずも里も目の前に近く、あざ〱さ見渡されたる景色、えもいはず。大方爰迄の道は山懷にてこさなる見る目も無かりしにさもいかめしき僧坊御堂の立ち連なりたるを、俄に見つけたろは、あらぬ世界に來たらん心地す。（菅笠日記上）

④咲殘る花に云々　雨中に咲き殘る花の艷姿は云はん方なく美しけれども、こもやがて前きに散りゆきし花さ同じ末路になりはてる事であらうさ思へば、夕暮は特にあはれはこもるさいふのである。

『初瀨山杉の木の間よ花見えて、
とのみいひさしてやみぬ。坂を下れば余喜天神なり。山の頂におはしますを麓より拜みまつりて、川に添ひて御堂に詣づ。立並びたる櫻の青葉勝なるが、中には眞盛りなるも打交りて匂ひ渡れるいと目[1]ざまし。
花[2]咲かふ木の間〳〵を吹立てゝ細殿深くかをる夕風。
高[3]殿に匂ひも深くこもりくの初瀨の山の山櫻花。
牡丹はいつ咲きべくもあらぬ様なり。かゝら

七頁 雨中人に媚ぶるが如き妖艷なる花の面影も思ひやられ且は忠孝がやがてはれにかへる花を惜むの切なる情の程も見えていさくよき歌である。
⑤こもりく 大和國初瀨の地は山懐ひろく圍んだ土地であるから隱り國の初瀨さつゞけるのである。

八頁 ①目ざまし 思ひの外にて目もさめる許りである。
②花咲かふの歌 夕風は花咲く木の間木の間を吹き立てゝ吹きまくつてざえらいかをりを立てしめ、さては細殿の奥の奥までもひどいかをりにみちみちてゐるさいふのである吹き立てゝ、深くなどの語句よく利きてこれもいさいさよき歌。
③高殿に云々 姿凜々しく調重き歌、初瀨の山の山櫻花はいさよくて匂ひも

むには三芳野の花も後れはせじと賴もしくなむ。名にし負ふ観世音は折しも御帳かゝげてあり。凄じげなる佛の御かた、か[1]はたれどきの仄暗きに見上げまつれるいと畏し。かくして搏[2]階下る頃、御堂には御燈つくる程なりけり。さればこゝに名だたる所々尋ねも得ざるが口惜しとて、『夕[3][7]間暮小止みだに無きあ[4][6]ま小舟はつ瀨の山はつ[5]ばらにも見ず。』と忠孝は呟きつゝ、里に降り、木屋の何某が家に宿り定めて、何くれと語らひていねぬ。夜も甚く更けぬらむと覺しくて、壁隣は靜まりたれど、い[8]やしく降れる

高ければ、高殿までもしみわたりて、其のかなりいさつよしさいふ意。このあたりの前後の文、頗るよく、いくたびくりかへしよむもよみあかぬ處である。

九頁 ①かはたれどき たそがれ時に同じく薄暗くて彼は誰さ見分けかれる時。即ち明方又夕方の稱。
②くれはし 榑の階段。丸木にて作りたる階段。
③夕まぐれ 夕暮。
④あま小舟 此は船の湊に行き到るをはつさ云へばはつせにいひかけたのである。枕詞。
⑤つばら 委曲。
⑥あま小舟 縁に雨をいひかけたのである。
⑦夕まぐれ云々 夕暮さはなりたる上に雨さへ小止みなくふつてゐるから名所のはつせの山もつばら

雨の音に、假寢の夢も打破られて、

『苦[1]しくもふりくる雨か草枕かりねの夢も結びあへぬまで。』

こもりく[2]の初瀨の里の旅枕ねての朝げの雨のふりはも。

忠孝もとく目をやさましつらむ。『春雨はいやしきふれりあすの旅いかにやなさむいやしきふれり。』といふ聲す。あすは多武の山坂分けなむとす。かくてはいかにやあらむ。先つ年我が登りしは、晴わたりて麗かなるだに、嶮しき道の行き惱みて、『足柄の神のみさかぞ思ひ

九頁 にも見ずと忠孝がこぼしたのである。

⑧いやしく　彌しく。いよいよふりしきる雨の音に、うたゝねの夢もやぶれたといふのである。

十頁 ①苦しくも云々　草枕旅のかりねの夢も結び遂ぐることの出來ぬまで苦しくふりくる雨といふのである。心苦しく身苦しさするは右轉左轉眠りつくことの出來ぬことからしてであることは勿論であるがその眠りつくことのできぬのは、もさ〳〵ひざくふりくる雨の爲にかの三芳野の花がちりゆかん事を痛く惜みて思ひ惱むことが根さなり居ればである。も、かは感動の助詞。

②こもりくの云々　花の旅してこもりくの初瀨の里に一宿すればふりくる雨に苦しくも終夜れられぬのみか寢ての朝げの勝に向ふころも尙雨のふり居るはこは又どうしたことかさしつこき雨に甚く困じはてた有樣をよんだのである。は、もは感動の助詞。

出づるなやましげなる今日の山路に。』と口すさみて、喘ぎ〳〵越え行きしを、今はかばかり甚く降る雨に、ぬかり[1]し道のいかでふみわくべきなんど語らふにつけて、忠よしが『さらでだにごえ[2]うきと聞く多武の坂かくてもふらば如何がなすべき。』といへるいとせむ方なげなり。十四日、朝とく宿りを立つ。雨はいやまさりまさりぬるいと苦し。

春雨はいやしき[3]ふれりいかにしてごえ[4]か往くらむ多武のみさかを。

誰も〳〵同じ心にかこたるゝ。せめて[5]疊紙に、

①ぬかりし道　地に泥多くて歩みにくい道。

②ごえうき　越え憂き。

③いやしきふれり　彌頻降れり。いよ〳〵しきりにふること。

④ごえかゆくらむ　越え往くらむか。

⑤せめて云々　心に思ひ詰つてきてたたう紙に歌をかいて長谷の川に流して雨の神に祈つたと云のである。たたう紙とはたゝみ紙の音便。又ふところ紙ともいふ、紙をたゝみ

花散らばいかにをしけむ[1]此あさげ雨やめ給へ八[2]大龍王。

とかきつけて長谷小川に流しやりつれどかひなし。仰ぎては雲のみながめられて、

西[3]ふかば雨もや[4]みなむ久[5]方の雲の行方やい[6]づちなるらむ。

道の左りに長谷の山口の神社手力雄命とて立せ給ふ。今は小さき御社なり。菅[7,9]笠の日記に昨日の余喜天神をさ[8]ならむと記したれど、さはあるまじくぞおぼゆる。ここを手力雄命としも申奉ることこそいと後ならめ。所の様は

① けむ　ここのは形容詞の語根について未來の意をいふ語。助動詞。
② 八大龍王　八種の龍王。難陀、跋難陀、娑竭羅、和修吉、德叉迦、阿那婆達多、摩那斯、優鉢羅風雨に關する天象を支配する龍である。大袈裟の樣であるが、さうでなく却てひゞきが大きくて一心に祈念してゐる心持が分る。
③ 西ふかば　西風ふかば。
④ やみなむ　はやまむに同じ。
⑤ 久方の　枕詞。
⑥ いづち　いづこ。
⑦ 菅笠日記　本居宣長翁が明和九年吉野の花見に行つた紀行文である本居宣長全集第四にでてゐる。
⑧ さならむ　然ならむ。

里の南に當りて山口といはむに違ふ可くもあらず。かの余喜の宮は、齋ひまつりし年月も定かにて、菅原の大おみのなる事は著き物をや。朱の鳥居を出でて大和大路にかゝる。いと賑はゝし。去にし年、『きつ[1]ゝなれて見ともあかめや』なんど口ずさみしも、このわたりにてありしかど、今日は只打曇りたるながめのみして遠方の山々は見ゆ可くもあらず。出雲、黒崎、追分、わたり過ぎ行くに左り手の弓取る方の山[2]の際に、櫻のこれかれ盛りと見ゆるが、青葉の木々に交はりたる、峯も麓も薄墨なす雨[3]もやひに包

十二頁
⑨ 菅笠日記云々　同日記に余喜天神をさうであらうと記してあるが余はさうでなからうと思ふと宣長の說に贊して居らぬのである。（菅笠日記七日の條に、それよりかの余喜天神に詣づ社は山の腹にやゝ平らなる所にたゝせ給へり長谷山口坐神の社と申せるはこれなんどにもやおはすらんさあり。これをさすのであらう。）

十三頁
① きつゝなれ云々　原歌不詳。
② 山のま　山のまゆ出雲の見らはきりなれや吉ぬの山のむれにたなびく（万葉三）
③ 雨もやひ　雨催合。さかりの櫻が青葉交りにあるがそれが薄墨の如き雨もやひに包まれて半ば許り見えるのが屛風の畵など

まれて、なからばかり見え渡れる、屏風の画なんどの心地していとうるはし。

若緑[1]しげきがもとも匂やかに櫻花さく春のむら山。

脇本、慈恩寺、なんどいへる所をすぎ、かな屋てふ里の半ばより右りへ分れ、細き道を辿りてみもろ路の麓に出づ。山松の木の間に只一木櫻の花の匂ひたる、今日の空さへ、『晴てゆく[2]峯の雲かとみもろ山松のこのまにさける櫻は。』と高田の吉迪は打ながめつゝ、猶行きて大御輪神社のふとまへ[3]に至れば、所がら神々しき事言ふ許

みる心地していとよしといふのである。此のあたりいとよき文。

①若緑云々　若葉したる松や、茂樹が中に交つて艶やかに美しく櫻花咲く春の群山であるといふのである。いとよき歌。

②晴れて行く云々　晴れ行く峯の雲かと見えるといふ見とみもろ山のみとかけたのである。

③ふとまへ　太前。神の前廣前。

りなく、手洗ひ口嗽ぎて伏し拜み、大御酒[1]のおろし賜はり、

綠りそふ千々のむら松とりよろふ[2]三輪の神山[3]たふときろかも。

山なみ[4]もわきてよろしとみもろ山神代おぼゆる杉の下かげ。

動きなきかき[5]はときはの松かげに神さびい[6]ます三輪の大かみ。

擱き言の葉も數そひて、拜殿のかたへを巡れば大塔宮の御物とてふるき保侶衣に、熊澤の何某母がをさめたる胡簶[7]なんど餝りたるを見す。

①大御酒　大と御と重ねて尊びいふ接頭語。酒はきおろしは神前に供へありしをおろして賜はつたといふのである。

②とりよろふ　取り具ふ。千々の綠松はとゝのひ揃ふてゐるといふのである。

③たふときろかも　たふときかな。ろ、かも皆感動の助詞。

④山なみ　山の並びつゞいてゐる具合もわけてよろしといふのである。

⑤かきは　かたきいはの約堅磐。ときはかきはは常磐堅磐（とこいはかたいは）とこしへ。万代不易。

⑥神さび　神進ぶ（かみさぶ）。古びて奇しく淒いこと神々しくある。

⑦やなぐひ　矢を入れて負ふ具。平たきものと細長いものとの二種ある。普通は十矢を入れる。えびらに似て輕粗である。

衣はげに違ふ可くもあらず。胡籙は伊勢の貞丈ぬしも論ひおかれたりし蜻蛉箙にて、いとうけがたき物にこそ。かくて三輪の里を過ぎ櫻井の里に休らひ、小川に架たるあやしげなる打橋を渡り行く道すがら、倉椅の山なんどもまのあたり見ゆめれど、雨の日はよろづすべなく[1]なむ。倉梯の岡の陵を始め、やむごとなき御わたりの御墓所も、これやかれやとあんなれど、尋ね奉りもあへず。それぞとおぼしき樣したる岡の、或は畠なんどにすかれたるも見ゆ。

山畠[2]と見しはひが目かいはまくもあやにか

①よろづすべなく　すべて爲べき手段がないといふのである。

②山畠と見し云々　前に山畠なんどにすかれたるとあるをうけて山畠と見たは見あやまりか申すさへもまことに畏れ多い御はか所をばといふのである三四五一二と句を直して見るがよい。

しこき御はかどころを。

多武の山の麓に至れば石の鳥居あり。粟殿なんどいへる村を經て川邊を行く。

打[1]たをり多武の山ぎりふみ分てたぎつ川べをいや川のぼる。

のぼるまに／＼、『春雨にたむの山川落たぎりこ[2]とゝふさへもわかたざりけり。』と忠孝がうたへるさへ定かならで、あやめも分かず、い[3]ぶせきに、八重[4]たなぎらふ雲の奥處[5]はおどろ／＼と響き渡りて、畏しなんども中々なり。

聞くからにわが腸もたゆるやと思ふ許りの

①打たをり　たむの枕詞。打及たは接頭語。をりは道の折れ曲るをいふ。たむは手廻る(たもとほる)の意。をりたもとほるといふ意に云ひかけたのである。(古義)たむの山ぎりをふみ分けて逆巻いて流れる川の邊を次第／＼に上つて行くといふのである。

②こととふ　事問ふさへも分ち得ぬといふのである

③いぶせきに　氣がふさぐのに。

④たなぎらふ　たなびく雲のためにうちくもること

⑤おくか　奥ぶかいところ

川のとゆゝし。
鳴神の今落ちかゝる心地して岩もとゆする
瀧つはや川。
一町毎に建てたる石の標數へもて行くに三十町といへる邊りまでは、坂道もやゝやすらけきを、それより上のけはしきことといはむ方なし。暫し行きては岩角に足ふみかけて立やすらひつゝ、辛うじて辿り上る。友なふ人だにこのもかのもと覺束なく、ぬば玉[1]の闇夜ゆくなす今日の旅路のわびしさは數へも盡されずなむ。しかすがに岩根こゞしき道のくまわ[2]に、咲き[3]をゝれる山吹の、かつ散る露も匂ひ渡れる、いと目ざましくて、これやかれやと見めでつゝ、行き〳〵て右り左りの谷がはの落合ふ所の橋を渡り、とある家に入りて休らひ居るに、忠よしは遙かに後れ來りつくを待つけて、山吹いかにと問ひかけしに、『ふる雨とぬかりになづみ[1]ものいはぬ花故さしもしらで過ぎにき。』となむいへるげにさることとなりけり。かくて町屋の前を通り打橋渡り、山の東の惣門より入りもて行くに、數多建てつらねし僧坊の前わたり植え並めたる櫻どものやゝ盛りすぎたれど、未だ見所はあり

①ぬば玉の　枕詞。
②くまわ　道の入りこんだ所。
③咲きをゝれる　咲きたわんでゐる。

①なづみ　澁滯して。

げなるも、今日の雨にひ[1]たしをれにしをれたるいと味氣なし。御社のあたりすべて嚴しく壯麗やかなるは言ふも更なり。道[2]の八十隈塵一つだに落ち散らさゞるぞ又なく目ざまし。こゝら茂れる若楓に咲交へたる花の匂ひ、曇らぬ日にてあらましかばと、返す〲口惜しくなむ。御前に額突き、御饌[3]のおろしなんど賜はりつゝ勅使殿護國院といへるを見るに、天井の板は、すべて唐木の限りして作れるが、中の間は悉く奇南木なりとぞ、きら〲しき金物數多打なめし、ゝ中にも、藤の紋は皆金をぞ用ひたる、めぐりに

①ひたしなれにしなれたる　のひたけ接頭語。しなれにしなれたるがいさ情けないさいふのである。

②道のやそくま　道のすみ〲までもちり一つ落散らさないのも又なく目もさめる程でおざろかれるさいふこさ。

③みけのおろし　神に供へた食物の下り。

かゝげし、三十六歌仙の額、かたは狩野の永德、歌は青蓮院の宮尊朝法親王の御筆とぞ。されど只はるかにのみ打眺めてつばらには目も及ばず。惣社や何かと拜がみ巡りて、こたびは西の方なる總門を出て、道を左りに取りて攀ぢ登るに、廣からぬ山坂の、雨にぬかりて、たど[1]〲しき事いふべくもあらず。手向[2]には四軒茶屋とてよき程なる屋あり。軒端の櫻いとめでたし。こゝは大和の國なか見渡さるゝ所にて、打開けたる國のまほらに、名にし負ふ三[3]つ山を始め、青[4]によし奈良の都、郡山高取城、生駒葛城、二上の山

①たど〲しきこさ　おぼつかないこさ。

②たむけ　越え行く山の坂路の登りつめた處。そこにて神に手向なすればしかいふ。今は音便で峠たうげさいふ。

③三つ山　名高きかの耳山かぐ山うれび山。

④青によし　奈良の枕詞。青土黏し(あなにれやし)さいふ意。にれやしのれな約めてにさいひやなよに通はしてあなによしさ

々も見え渡り、やゝ登りて上なるたむけに至れば、吉野、大峯、熊野、高野の遠きわたりも目に及びて、道のこゝしさも忘らゆ許り、めづらしきに、今日の眺めよ、只おほゝしき[1]霧の海の、何處をはかりとも見え分かず、杉村ゆする嵐の風も、浪の音かと誤たれ、物凄まじき心地ぞする。道のかたへに、柴人の伐りはふりし[2]、柞や何やと打交れるが中に、櫻の木も數多あり。又花ながらなるも見ゆ。

あはれいかにあたら櫻を心なく柴になしたりしこの山人[3]。

はいふのである。袖中抄にも昔奈良坂に青き土ありてゐがく丹(に)に用ひたるよしかいてあるのはより所ある事であらう。かくて眉をかき畫をかくには青にをれやして用ひるからやがてその青にをれやす奈良とつゞけたのであらう。(古義)

①おほゝしき　おぼおぼしと同じ。はきとせずぼつとした霧のうみの如くにていづこを限りともはてとも見え分かずといふのである。

②伐りはふり　伐り散らした。

③しこの山人をその柴人　しこといひ、をそといふは柴人の不風流なのをにくみ罵りていふのである。しこは醜をそはうそ。

眞盛りに花も匂へる櫻木を伐りはふりたりをその柴人。

なんどいひもて行くに道の隈回(くまわ)にいと大きやかなる櫻の、今を盛りと匂ひ渡れるが、枝より枝に山つゞら[1]這ひかゝりて、綠の色花に交はり、麗はしく見えたるに、

花の枝に青つゞらさへ引きはえて錦に見ゆる山の岩かげ。

かくて五十町といへる坂道を、ひた下りくだりて、瀧の畑の里に到り著(つ)き、あやしげなる藁屋に休らひて蓬のもちひ[2]なんどあがなひ食ふ。餓

①つゞら　葛。蔓草。山野に甚だ多し。

②もちひ　糯飯(もちいひ)今は約めて餅(もち)

ゑなむよりは勝れりとての仕業なりけり。こゝに面白く咲きたる石楠花(さくなげ)あり。わぎへ[1]のあたりには、卯月の初めつ方、近江國より取り來りて、市町を賣りありく。年にはよれど大方蕾み たるぞ多かる。こゝなるはいつも早く咲けるにやあるらむ。葉なんども小さくて、品かはりて見ゆ。『山川はたぎち流るゝ瀧が畑咲く石楠花の花もめづらし』と忠孝はよみ出せり。尙下りて、山懷なる里を千俣といふ。それ過ぐればば上市里なり。やがて吉野の麓にて思ひ入る山もまのあたり見え初めたり。

①わぎへ　我家の約。

　さぐもり[1]雨は降れども心あての山し見ゆればおむがし[2]きかも。

　からかさをさして入るさのみよし野の山の櫻のちらまく[3]も惜し。

吉野川船より渡る。是なむ世には櫻の渡しといふめり。船ばたに立ちよりて、掬べば水もかをりなむ。此方彼方に透間なく引き連ねたる筏は、花の中をや分け來ぬらむといとゆかし。波の姿も匂やかなるに、『吉野川さきちる花の面影も見えて八十瀬に落つる白浪』とぞ吉迪は打ち出でたる。妹の山遙かに見ゆ。背山は

①さぐもり　眞陰りに同じさは接頭語。くもり（曇り）に同じ。万葉十三にたなぐもり雪はふりきぬさぐもり雨はふりきぬさあり。
②おむがし　喜ばし嬉し。
③ちらまく　散らむ。
○さぐもりの歌、
○からかさの歌、
右二首の歌意明である。

夙く水の爲に流されしとか。されどまことの妹背山は、紀伊國にこそあんなれ。こは近き世の、人のさ[1]がしらにしかいひそめたるが、今は名所の如なりにたり。しかすがに[2]此いも山も、宜しき程の山にはありけり。鈴屋翁が『妹[3]背山なき名もよしや吉野川世に流[4]れてはそれとこそ見め。』とよみおきたるを思ひよせて、忠[5]よし
『よしもなき妹背の山も吉野川なき名もよしや見るもめづらし』口ずさみつゝ行く。此川邊よりたゞ登りに登りなば、道の程近からむを飯貝、丹治なんどいふ村々打ちめぐりて、半里に

①さがしら　物しりぶり。利巧振。
②しかすがに　さはいふものゝ。さすがに。
③妹背山の歌　菅笠日記上にあろうた。
④流れては　世にふりては世の末さなつては。
⑤忠よし　忠孝。

は猶餘りぬらむ。七回りてふ坂の麓に至りつきしは、黄昏近き頃にてぞありし。山口の花ははや大方に散りはてたり。

辿り來し甲斐こそなけれ瑞[1]枝さす木々の若葉にながめのみして。

抑々このわたりのさ[2]がしさ、多武のみ坂に比べたらむには、何許りの事にしもあらず。況してや花のこ[3]むらを分け行くなる、飽く事知らぬ道なんめれど、昨日より小止まぬ雨に、打ち惱まされて、困じ果てたるに、腹さへ空しくなりにたれば、いとも〱喘[4]ぎ〱辿り行く。こ

①瑞枝　みづ〱しき若枝
②さがしさ　嶮しさ。
③こむら　花の木叢。木の枝の相交れる陰。
④喘ぎ〱　息つき〱。

ゝぞ千本と名に負ふ花も、大方は青葉なるが、中には猶さかりなるも、これかれ立ち交りて、分けのぼる千本の櫻名のみして四もと五もと花ぞ殘れる。

流石に道々の隈々も匂ひ渡れる心地して、仰ぎめでては立ち休らひ、伏目[1]に見ては衣手[2]にひたゝる雨を打ち拂ひつゝ、空だに晴れてあらましかば、樂しかるべき山ぶみ[3]ならむを、わびしさも詮方なさも數そひて、互みに歎き語らひつゝ、四手掛明神の御前より山の尾上に至れば、六つ田の方より登れる行きあふ。　こゝより南は町屋

①ふしめ　伏目、うつむくこと。
②衣手　袖。衣(そ)手(で)
③山ぶみ。

建ち續き、賑はゝしくて、山の中ともあらぬ様なり。　顧みすれば分け來し道も埋もれて、彌が上に立ち重なり、目の及ぶ限りごと〴〵[1]に櫻木の群りたる、盛りにて眺めたらむには、行先もかへさ[2]も忘られて、こゝにのみとや思ふ可からむ。

今は若葉にかはりにたれど、散りあへぬも猶數多にて、鹿子斑[3]に殘れる雪の様したる、異所には又似通へるもあるまじきけはひ[4]なり。　忠孝はひとり後れて物せしが、『見下せば千本が中に百本は今も盛りとみよし野の花。』となむいへりしと宿りに着きてぞ語り出でたる。　わが麓

①こゝ〳〵に　別々に。異々に。
②かへさ　還樣。かへるさに同じ。
③かのこまだら　かのこまだらの如くに殘れる。
④けはひ　氣延。氣色。

にて口ずさみしとは、殊更に見直されにけり。花ものいはゞ喜び[1]なむ。大橋とて谷川に渡せるは、大坂[2]の右大臣の、建部の何某ぬしに奉行させて、造らしめられしとか。鐫りつけたる銅の葱法師の半ば朽ち損はれたるが、其欄干につきたり。打渡りつゝ、二三町許り行けば大きなる銅の鳥居あり。やゝ行きて湯川屋てふ家に宿り定む。

十五日、晨[3]めて起き出る。雨猶やまず。『久方のしこ春雨よけふなふりそせめて晴間に奥の花見む。』と忠孝はつぶやき居り、けさはとく宿

① 喜びなむ　喜ばむ。
② 大阪の右大臣　秀頼公。
③ つとめて　夙めて、朝早く。

を立ちて、こゝかしこ見めぐらむと思ふなるに此屋にあらゆる男女みな、熟睡のみして、何時さむべくもあらず。家[1]つ鳥さへ、夜あけて後になきそめたり。

三芳野は山霧深[2]み庭[3]つ鳥かけの鳴く音も遅くぞありける。

日もやゝたけてぞ、朝[4]げ調へて、ここを立つ。かねては昨日の夕べ、近きわたりの、名たゝる所見ありきて、けふ朝まだきより、奥なる花を尋ねむと、思ひ來しを、雨づつみに道おくれて、辿りわびにしのみか、今日さへ空しく時違ひぬる、いとも

① 家つ鳥　にはとり。
② 深み　深さいふ形容詞の語根にみさいふ接尾語。山霧のふかき故に鷄の鳴くもおそいさいふのである。
③ 庭つ鳥　かけの枕詞。鷄即ちかけは家の庭にすむ鳥であるから庭つ鳥さいふ言葉をおいたのである野つ鳥、雉さいふのさ同じである。
④ 朝け　朝食。

いともほい[1]なくなむ。只雨は先程よりやみたれど、空尚曇りにたり。しかすがに、花ふみ分くる今日の道は、いと心行く許りにて、昨日には比ふべくもあらざりけり。

此あさげうつゝ[2]に花をみよし野の夢に結びししをり尋ねて。

やゝ行けば藏王堂なり。こはかへりにこそ物せめとて右りの方に見過しつゝ、先づ吉水の院に詣づ。こゝなる殿は、昔役の小角の營み始めたんなるを傳へて、ここかしこ繕ひとゞのへたるにてぞありける。千年に餘れる今のをつゝ[3]

①ほい　本意。

②うつゝ　夢の對。現實、正氣、まぼろし等の意に用ひられるが、ここでは此の朝目ざめて現實に、さいふ程の意。三芳野に宿つた夜（以前の昨夜のも含めて云ふてゐる）の夢に結んだはかなき心覺えの道しをりを尋れ探つて此朝けは目ざめて現實にみよしのゝ花さいふものを見るさ云ふの意。うつゝ、結ぶ、花、尋ぬる、しをり、あさ、以上皆夢に多少の緣のある言葉。いさよき歌。

③をつゝ　うつゝさ同じ。

に、當時の面影變らで殘れるいとめづらし。い[1]はまくも畏けれど、延元の亂れには、後醍醐の帝もこゝに大御幸ましまして、假初の大宮所と定め給ひて、百の司を從ひつどひ參らせけむ。かかるささやかなる殿の端近きに、いかにしてかはおはしつらむといと畏し。其の時のなごり[2]とて、御軍人の押して張りたる弓はず[3]のあと、虫かめる柱や長押に、數多殘れるを見るにつけても、忌々しきまがこと[4]の思ひ出でられていと悲し。

古[5]の跡もさやかにみよし野の千年ふるやの

①いはまく　いはむ。まくはむの延。未然につく。

②なごり　其時代の遺品。

③弓はず　弓筈。弓のつるをかける所の上下兩端であるがここは只弓の意。

④まがこさ　禍事。弓はずのあさなどが虫ばめる柱やなげしにあまた殘れるを見るにつけても容易ならぬそのかみの騷ぎのことが思ひ出でられていさ悲しさいふのである。

⑤古の跡云々　そのかみのゆはずのさはぎのあさも

軒の松風。

吉野山杉[1]のむら立跡ふりし大宮所見ればゆゆしも。

なんど口ずさみたる、忘れもやらねば、こたびはしばし又いふこともあらず。　忠孝は、『吉水としばしましけむ御あと見れば昔しぬばゆあはれよし水。』といひつゝ、背[2]ざまに建ちつゞけたる屋のうちに立たせ給へる、かの帝の大御像を拜がみまつる。　こは後村上の帝の、大御手づからきざみ奉らせ給へりしとぞいふなる。　又手ならし給へる御物や何やと、とうでて[3]見す。　國軸丸と

明亮に見る事が出來る所の吉野の千年ふる屋の（へ經る、古る）軒近き松に風過ぎて聲あるを耳にしては、いよゝ昔の偲ばれます〳〵うら悲しくなるといふのである。

①吉野山杉云々　吉野山杉のむら立跡ふりて多くの年代を經た。そのへた所にやはりあまたの年代をへた南朝のみかどの大宮所があるが、それを拜すれば實に容易ならぬゆゝしき至極の感慨を起すといふのである。實にかゝる御たちものに宮居し給ふかと思へば實に容易ならぬ感が胸をついてきたり、不忠の臣は益々にくく萬石のあつき涙はわき返るであらう。これら二つのうたもいとよき歌である。

②うしろざま　後方。

③とうでて　とり出して見せた。

名づけ給へる笙の笛は、今の如きら〳〵しからで、簀なども木にて作りしを塗りたるにやとおぼし。　管は銅の輪をもてしめたり。　御冠にすゑさせ給ひしといふ赤玉は、徑り一寸あまりやあるらむ、目[1]もはゆきまで照り輝きて、又比ふべき物はあらじかし。　大塔宮の御物とて、猩々毛もて綴れる蓑は、いまのから[2]のかしらなんどいへるものとは樣かはりて、いと珍らかなり。　伊豫守義經ぬしの腹卷、太刀や何やと數多あり。　こと〴〵には書きもしるさず。　すべて此の院に傳へたるふるき寶どもは、庫にも餘れるばか

①目もはゆき　目も映ゆき目ばゆきまでてりかゞやいてならぶべき程の物はないといふのである。

②からのかしら　唐の首。支那産の犛牛といふ獸の尾を兜の上に飾るをいふ。

り數多しとて、其のしるし[1]をも見す。又此の院の庭の内より、遙かに見出せば、子守勝手の御社雲井の櫻、瀧櫻なんど、ながめも多かるを、今日は行先の急がれて、目も止めあへずなむ。町なか通りて、櫻本坊といへるに入りて休らふ。いと廣き屋をあまた所上り下りなんどして、よろしき程に建ち續けたり。書院のふすまは、狩野雅樂助何がしが山水の画なり。其のかたへに三寶院宮のおましの殿あり。何處もきら〱し[2]くうるはし[3]くゑがきてあり。されど皆近き世のものにしあんなれば、さしも目とゞまらず。

①しるし　記し。心覺えさなるもの。
②きら〱し　煌々。きらめく状。
③うるはし　麗はし。美し

かくて佐抛勝手なんど名たゝる御社伏し拜がみつゝ、竹林院に入りて、庭の隈々い[1]ゆきめぐるに、山みづの姿、面白く作りなして、やゝ上れば平らかなる岡あり。散り殘りたる花の木どもあまたあり。木陰に筵しきて、糸竹取り交へなんど、ここ[2]らの人々立ちつどひ、春に競ひて群れ遊ぶ所なれど、よべまでふりしきる雨のけ[3]にや、けふはさるけ[4]はひもなし。しかはあれども、おとつひよりながめのみせし空はれて、葛城の高ねも、雲のあなたに聳え、分け來し多武の山坂も、定かに見出され、すべて此山の名所ども、杉むらの

①いゆき　いは接頭語。行きに同じ。
②ここら　あまた。
③け　故（かれ）の約。故（ゆゑ）。
④けはひ　氣色。

此方彼方につゞきたる、得もいはぬけしきに、やゝ時を移して、立ち出づるほど、天つ日陰も珍らかにさしそめぬる、萬よりも樂しくて、『[1][2]きぞの雨の苦しかりしもうちはれて碧の空を見るぞ嬉しき。』と忠孝は口ずさみて行く。たち續きし僧坊町屋もまばらになりもて行き、坂道をひた上りのぼりて、夢違の觀音の堂の前なるさゝやかなる森の陰に、後醍醐天皇のいこはせ給ひし頓宮の跡としるしつけたるあり。それ過ぎて道のゆくてに植なべし櫻を、布引櫻とやいふらむ。青葉が中に折々は目さむる許り咲き匂

①きぞ　昨日。
②きぞの雨云々　昨日の雨の苦しかつたこともも空のうちはれたやうにはれてみどりの空を見るが嬉しといふのである。
③頓宮　かりみや。行宮。

へるも打ち交れり。瀧櫻雲井櫻も此わたりなんめれど、今は其の盛りすぎにたれば、定かに、それとも知られずなむ。『よそにのみ聞きてや過ぎむ瀧櫻雲井の花も霞こめつゝ。』と同じ人は打ちながめてや、上れば、世尊寺とてふるき寺あり。この後は鷲尾山なり。鷲尾櫻とて品變れるも、世には名高かれど、こ[1]〇にはそれとしもなき樣なり。されど此のわたりに、いと大きやかなる櫻木はこれかれあり。糸櫻のまだ散りはてぬさへも見ゆ。こゝなる山に、伊勢の大御神を齋き奉れる宮あり。御前にすゑたる瓶

①こ〇は　〇の所虫ばみ定かならず。

子一双(ふたつ)、大将軍家よりや参らせられたりけむ。葵のかたつきて、松や鶴やと画がきたる、いとみやびかにめでたし。少し上れば、永暦の年に鑄られたる古き鐘あり。世には吉野三郎とやいふらむ。見めぐりつゝ、又五六町も上れば、水分(みくまり)①の峯の神社なり。此の神のゆゑよしは、本居の宣長がつばらかに考へしるしたる物あれば、こゝにはいはず。今は子守明神と申し奉りて、うみの子の榮えを守らせ給ふなれば、心こめて拝がみまつる。御社いかめしくて、いと神々しく物ふりたり。されどこゝにも、先きに詣でし勝

①みくまりの社　この社のことはかのすがゝさ日記の上の巻のみまくりの條の所にいさ長くかきしるしてあるから委しくはその日記につきて見よ。

手の神の御まへにも、神の御かたとて、かゝげて人にをがませなんど、後の世のしわざこそ、見にくかりけれ。麓には盛りなる花も、一木二木(ひとき ふたき)殘れり。これもかれも大きやかにて見所あり。いとゞさへ此の春は、雨の日の多かるに、昨日の降りの烈しさ加はりて、名にしおへる花の山も見どころなくてやありなむと、それのみかこたれしも、思ひの外に晴れ渡りて麗かなるに、咲き殘りたる木どもも、日たくるまに〳〵色添へて道のゆく手も面白く、實によき人①のよしと見てよしといひけむ程著(しる)く、山の姿もことゝころの

①よき人の　よき人のよしとよく見てよしといひしよしのよくみよ、よき人よくみ（万葉巻一）

たぐひならで、青[1]葉の奥のくま〴〵まで、花ならねども、目とゞまるふし多きに、ましてや花のまだ移ろひはてぬほどに來あひたるをや。幸なしとしもいふ可からずなむ。

春[2]の雨にぬれまどひつゝ辿り來し山のかひある花をこそ見れ。

道を右りに取りてやゝ登れば、四方の見渡し打ちはれたる高やまの尾[3]上に出づ。いや上りに上り行く。向峯(むかつを)のたかねは、緑りの色に作りたてたらむにやとおぼしき杉むらの、木の間このまに立双びたる櫻の花も、今をさかりと匂へ

①青葉の奥のくま〴〵　奥のすみ〴〵までも花ではなけれど目止まるにまして花のさかりのころ來あひたらばいかによからむさいふのである。

②春の雨云々　春雨にぬれまどひて辛うじて辿りきたかひもあつて名ある山の花を見ることができたさいふのである。かひ（へ峽）も辿るも山に緣のある言葉。

③尾上　をのへ。山の高き所。山巓。

るなむ、画にも及ばぬ有樣なる、況(ま)して足らはぬ言の葉の、いかでかは盡さるべき。

山[1]もよし花もめでたし玉[2]だすきかけて及ばむ言の葉もなし。

今日はまたこゝをせ[3]にせ[4]むみよし野の吉野の山に花は多けど。

猶上れば、大きなる朱の鳥居あり。其の奥に此の山しろしめす金(かね)の御(み)嶽(たけ)の神社もおはします。今は金精(こんじやう)大明神と申し奉りて、御[5]あらかなんどもいと小さく、拝殿めくものも、大峯詣する賤の男らの休らひ所とぞなれりける。そこ守

①山もよし云々　かけていはむ言の葉もなきほど山も花もよしさいふのである。

②玉だすき　玉襷。うねびかくの枕詞。

③せに　せは名詞。こゝをさしあたり最上の見所さしようさいふのである。

④せむ　このせは佐行變格の動詞のせ。爲。

⑤御あらか　御在所。御殿のこさ。

れるをのこにや、あやしげなるが人を導きて、東の方の谷陰に、蹴ぬけの塔とて古き塔のあるにつれいたり、得知れぬ歌を唱へながら鐘打ちならして、聊かのあし[1]求めて、世渡りぐさとぞす[2]なる。世には様々の嗚呼[3]なる者もありけり。古偲ぶ我がともの、假初にも足とゞむべき所ならずかし。さはいへこゝに大きやかなる一木の櫻のいとめでたきが、猶ま盛りに咲きみちたるさすがに昔忍ばれて懐かしく、『大かみの御たまちはひ[4]てたふとくも盛り久しき花の一本。』と吉迪は口ずさみつ。尚山深くも分けのぼる

①あし　錢の番名。
②す　例の佐行變格活用の動詞の爲(す)。
③嗚呼　をこ。世には色々の阿呆者もあるさいふのである。
④ちはふ　神より幸を與へて、さちはふの略。

に、つゝといへる鳥の、我が行く道のしるべする如、先きに立ちて鳴き渡れる、世離れたる心地ぞする。かくて安禪寺に到り青根がみねを眞近く見つゝ、細道を下り行く所に、細小やかなる流れあり。片方の石に、苔清水とゑりつけたり。行き〳〵て谷陰のやゝ平らなる所は、昔圓位法[1]師の、しばしが程庵りし居たる跡とか、今もかたばかりの屋作りてあり。彼法師の像とて、瓦もて造れるをすゑたり。いと近き世のえせ[2]物にて、見るもいぶせき心地ぞする。此わたりに花の木叢[3]もあんなれど、今は皆散り果てにたり。

①圓位法師　西行法師。
②えせ者　似非者。
③木むら　木叢。木のむれたる處。

せめて盛(さかり)にてだもあらましかば、谷の岨(そば)[1]道からうじて上り下りし甲斐ありけなるも、それはた[2]かばかりの花はこゝまでものせずとも見るべからむ。くやしくも淺ましく賤しげなる所見むとて、あたらひまとりし事よと思へど、詮方なし。かねてのあらましは、昨日多武の山より、直ちに龍門の嶽に至り、名たゝる瀧を見たらむにも、猶未下る頃ほひにはみよしのに行きつきなむ。夕つ方吉水勝手なんど見めぐりて、今日朝未曉(まだき)より物して、奥なる大瀧宮瀧なんどいへる名にしおへる所々、尋ね見むものをと、下構(したがま)[3]へし

①そば道　嶮道。けはしき道。
②はた　又。
③下構へ　かねてよりの準備。用意。

たりしかど、思ひしよりは遲なはり、それさへあるに、けさのあさい[1]に立ち後れて、藏王堂より五十町とかいへる、安禪寺に赴きしは、午過ぐる比にてぞありけむ。こゝより瀧津河邊までは、まだ三里もやあるらむ、山路暮らして歸り[2]なむもいぶせきに、明日の道さへ急がれて、心ならずも思ひ止まり、分け來し道には返り出でぬ。見れ[3]ど飽かぬたぎつかふちを音にだに聞かでぞありけるあたら瀧津瀨。

道の邊の花はすべてけさより色添はりて見えたるが、わきて佐抛明神の御前(おまへ)の花よ、けさは

①あさい　朝寢。
②歸りなむ　歸らむ。
③みれどあかぬ　みれどあかぬよしぬの川のさこなめのたゆろ事なく又かつり見む（萬葉卷一）見れどあかぬ滾つ河内な音にだも聞かずて過ぎるは惜むべしさいふのである。

ありとしも心附かざる程なりしが、いときらきらしく光りそひて、匂ひ渡れるぞ珍らしき。勝手の御社の御前邊(おまへわた)りより道を東に取りて、谷べに下りては又上りつゝ、如意輪寺に詣づ。堂も何もいと物ふりたる所なり。堂の後の山のべに、木の葉に埋もれし細道のいとあれたるがあり。これなむ塔の尾の御陵なるべきと、辿り行きしもしるく、やゝ上れば石の燈籠なんど建ちたり。燈籠は、侍醫丹波の何がしぬしの、今より二百年ばかりのあなたに奉れる物なるに、それさへ半ばかけ損はれたるが苔蒸して見ゆ。石

の[1]階(きだはし)少し上れる所、やがてかの御なりけり。小高く築(つ)きたる岡の、いさゝむら竹生ひ茂れる中に松樫なんど數多立ち重なり、いと大きなる木の朽ち倒れたるなどもありて、廻らしたる石の御垣も、これが爲に歪(ゆが)み損なはれたるを、見奉る悲しさ云はむ方なし。[2]しゝじもの、膝折りふせて拜がみまつり、[3]袖しをりつゝ下り來て、坊に入りて見るに、老たる法師一人居り、何くれ物語らひつゝ休らふ。此寺德少しとて、僧なんども久しく住めるはまれ〲なれば、ひた荒れにのみあれ行くが悲しとて、[4]村肝の心ふり起して、書院(そいん)

①きだはし　段（きだ）階（はし）

②ししじもの　鹿の如く這ひ、又膝折るといふよりいはひ、又膝折るにかけ又猪の水に漬（つ）きかくるといふよりみづくへこもりにかく。

③袖しをり　偲ぶ涙に袖うちしをりしなべつゝ下り來たといふのである。

④村肝の　むらがれる肝即五藏六腑をいふ。心の枕詞。

をば近き年修理せしとか。高御座[1]設け、御簾かけ渡し、後醍醐の帝の大御像をかゝげ奉れり。こは江戸の人菊池の何がしなる者、此の院修理せし比に來あひたるが、昔その遠祖の、まめやかに仕へまつりし御ゆかりにつきて、畏くも寫し奉らまほしと、申し請ひて歸れるが、一昨年の春再び請ひつゝ、麗はしく畫きたる宸影をもたらし來て、かくいつきまつれるなりとぞいふ。次の間には、左衞門大夫正行主の像をもかゝげたり。これはたよろしくうつしたり。何がし寺なる沙彌[2]の、まだ十五とかいふがゑがきしにて

①高御座　たかみくら。天皇のつきたまふ御座の稱

②沙彌　もと梵語。佛門に

十余年が程謹みさもらひし有樣見えて、幼きものゝ手にはかばかりにても許されなむやなんどいふ。されば此の年頃こゝに詣で來る人ある每に、歌にまれからうた[1]にまれこひとりて、手向け參らすなれば、そこたちにも心のまにまかきつけてよと、まめだち[2]すゝむるにぞ、我が輩はさるみやびたることをも知らずと、あまたゝび否びたれど[3]許さゞれば、詮方なくも料紙こひて畏けれど書き出したる歌、

荒れまさる[4]御陵のべをいはむすべせむすべしらに[5]たもとほりすも[6]。

入りて剃髮し受戒したばかりの男子。僧行未熟なる初心の男僧。

①からうた　漢詩。

②まめだち　忠實立。まじめになつて。

③否びたれど　辭退したれど。

④荒れまさる云々　荒れまさる御陵ををろがみまつりては、餘りの畏さに、いふべきやうもなすべきやうも知らず唯うろ／＼さ荒れまさる御陵のあたりを行き回りしてゐるといふのである。思ひせまりて、激切の情に堪へないといふ點も見え、又尊皇の心のいみじく厚い程もよく分るいさよき歌。

⑤に　ずの活用ぬの轉。ずして。もは感動の助詞。

⑥たもとほりすも　たは接頭語。もとほるは回にてめぐり、まはる、徘徊す

数[1]ならぬ御民われすら跡ふりし昔思へばいきどほろしも。

醜しと人やいふらむ。こよなき恥をぞとゞめにたる。しかすがに此の法師の心ざしは殊勝にこそ。忠よしも『[2]ふりし世の其のまがことを思ふにもをろがむ袖のしほたるゝ哉』と詠みて奉れり。倩名にし負ふ如意輪塔の扉をも、見まほしと請へるに、僧は先きに立ちて、あやしげに傾きたる庫の内に案内して、ふるき佛や何やと取り出だして見す。先づ藏王權現の御像は、役の小角の作れるにて、龕の中なる繪は、大

① 数ならぬ云々　身は物のかずならねども、そのかずならぬ我等でさへ、古りし昔のあと即ち南朝の遺跡を訪へば、そのかみの事の甚じく偲ばれて、さては激憤に堪へずといふのである。もは感動の助詞。これもよき歌。

② ふりし世の云々　今かく來りて荒れまさる御陵をながめをろがみまつれば、そのかみ後醍醐天皇が受けさせられたまがこと即ち御災難の程を思ひ出されてわきいづる萬石の熱き涙に拜む雨の袂はぬれまさるといふのである。しほたるゝとは潮垂るゝにて蜑の袖の濡れたることにいふのであるが、轉じて涙にて袖ぬれそほづといふにも用ひられる。この歌をとほして作者の深き尊皇心がよく分る。

和國より、紀伊國かけて、所々にしづまります神々の御かたとかや。巨勢の金岡が筆なりとぞいかにやあるらむ、見所あるものにてぞありける。其上に色紙形押しつらねて、後醍醐の帝の御からうた遊しつけたり。片方なる龕には、同じ帝の大御かたもおはします。又大御手に手ならし給へる御硯の筺は、墨塗りにて、蓮の花の散りたる中に、三日月出せしかたあり。裡は格子の如くにして、赤く塗りたり。御硯はいつの程にかはふれ[1]失せて、今はなしと云へるぞあた[2]らしき。金をのべたる長柄の御銚子、めさせ給

① はふれうせ　放れ失せ。放れ散り失せたこと。

② あたらしき　可惜しき。

ひし御茶臺もあり。そは[1]塵地に塗りたる物にて、御行宮にわたらせ給へりし程、仰せごとありて、金輪寺形とてあまた造らしめられたるがうちなりとぞ。又此の寺開きし日藏法師が、竹布の袈裟てふものあり。古びたるものにて定かならねど、よの常の布とは品かはりて見ゆ。彼の扉はいづこにありやと見るに、雨なんども漏りつるにや。汚れたる壁の隈に、かりそめに立てかけたるぞ淺ましき。こひわたして見るに漆塗りたる扉の面に、矢のさきして、『かゑらじとかねて思へば梓弓なき數にいる名をぞとゞ

①塵地 漆ぬりの語。梨地に同じ。

むる。』と若やかなる手して彫りつけたるが、さながら拙なからず見ゆ。今日を限りと思ひ入りにし心のうち、押しはかられ見ぬ世の面影も立ちそひつゝ[1]はふり落ちくる涙押へて、

[2]梓弓かへらぬ昔くりかへし忍ぶ涙にぬるゝ袖かな。

胸ふたがりてつばらかには目も止めず。其の時の物とて、胴丸の鎧一領、藍革縅にてやあるらむ、甚く損なはれしを、あやしき筺に入れてあり。鞍橋は悉くに虫ばみて、朽ち殘れるがかたばかりぞある。[3]とり〴〵にいと悲し。兎角し

①はふり落ちくる 散り落ちくる涙。

②梓弓云々 昔のことは今更返らぬども、激感の餘りにいくたびも〱繰り返し〱てその昔をおもふ涙に我が袖は打ちぬるゝといふのである。

③さり〴〵に 彼れもこれも見るにつけいさ悲しさいふのである。

て日影も傾きにたれば、暇告げて立ち出づ。本の道をかへり、町中を經て、藏王堂に詣づ。お前に額づきつゝ見るに、廣さは十丈餘りやあるらむ。作りざま古めかしく、柱の限りいと太き黒木を用ひたるが、中には躑躅の木と言ひ傳ふるなんどもあり。堂の前に石敷きなべて櫻四もとを植う。うたまひ仕へまつる所とぞ。大塔は早く燒け失せて、礎許りなるが、傍らに昔の空[1]輪の殘れるなりとて、かけ損はれたるがあり。西の方なる石の階を下れば、實城寺なり。こも御行宮の跡なりとぞいふ。今は殿も何も作り

① くりん　塔のあたま多くは層になつてゐる。

改められたれど、聖護院宮のいらせ給ふ所なれば、きらびやかなる[1]おましなどもありとて、[2]こひ見まくせしかど、今日はさはることありて許さゞりしかば、力及ばず。よべ宿りし屋にかへりて物[3]したゝめて立ち出でしは、未下る頃にやあるらむ。銅鳥居を超えて、こたびは昨日ものせし七曲りを、遙かに見下し、山の背の道を左りざまへ分れて、六つ田の方に出づ。打ち見やりたるさま昨日に勝り、青葉が中に立ち交りて、[4]咲きをゝれる、花の匂もいやまさりつゝ、日かげに[5]きらひてのどやかなる、えもいはぬけはひに、立ち

① おまし　御座所。
② こひ見まく　まくはむの延こひ見むとせしかど。
③ したゝむ　ここでは食はすといふ程の意。
④ 咲きをゝれる　さき撓める。
⑤ きらびて　燿びて美しく

止まりては休らひつゝ、引きとめらるゝ心地ぞする。

春[1]はたゞあくまで花をみよし野の吉野の山に家をらましを。

か[2]さねきてまたみよし野の花ころもたゝまくをしき木々のした蔭。

忠孝[3]『昨日見し雨の櫻に彌增して色香ことなるはなのかず〳〵。』『皆[4]咲きし程こそ嘸とみよし野の靑葉に花の盛りをぞ思ふ。』『よ[5]き人のよしとよしとい ひつる吉野山靑葉交りの花もまたよし』吉迪、『暇[6]ある身にしありせば日ならべて

①春はたゞ云々　外の事にはあらで只花をあくまで見んがため吉野の山に家居してをらむといふのである。うしろがみつかまれてゐるやうな樣子がよく見えてゐる。
②かさねきて云々　花衣立たむが惜しき花の木々の下かげであるから又重れて來て見むといふのであろ。前歌に同じく花に別れの惜まれて心引かれてゐる樣子がよく見えてゐる花衣は櫻色の花をいふ古語であるが、こゝはたゝむといふための序詞である。たゝむは立たむ斷れ、き、たゝまくは衣のたむを兼れてゐる。かさ緣語。
③昨日見し云々
④皆咲きし云々
⑤よき人の云々
⑥暇ある云々

よし野の山にかくし遊ばな。』『なら[1]はせに旅のうけくは思へども立ち去り難きみよし野の山。』なんどよみつゞけたり。返す〳〵も眞盛りの程すぎにたるこそ恨めしけれ。このわたりより六田の里まで、一里に餘れる道のかたはら、悉くにうゑなべたる櫻どもゝ、大方は散り果てたり。まれ〳〵にはまだ盛りなるもなきにはあらず。やゝ行けば辻堂めく物あり。片方に村上義照が墓とて高取の君の家人何がしが記したる石碑を建てたり。急がはしければ立ちもとまらで打ち過ぐ。道[2]ゆきぶりにうるは

①ならはせに何れも歌意明かである。
②道行振　道を通る片手に花の一枝を折つたりして兎角花に別れの惜まれたさいふのである。

しき花のひと枝折りかざしなんど、なごりのみ惜まれて、しば〳〵顧みしつゝ行くに、分け來し山々も見えずのみなりまさりて、まだ見ぬ山ぞ行先にはつゞきたる。下りつきぬれば六田の里なり。船さし渡りて、彼方の岸を北六田とぞいふ。六田の淀はいづこにや。昔柳の名たゝる所なりしも、今は一もとだに見えず。されどこゝを柳の渡しとは今も稱ふる。せめてもの記念なりけり。しばし休らひ、にのを村といふを過ぎて、越部の里なる松屋の何がしが家に宿る。高き屋にふしど定めて、曉かけて起き出で

つゝ、窓引きあけて見出せば、山々のたゝずまひ川の流れも遠著く、霞める月の匂やかなる得もいはぬ有樣なり。

青柳のかづらき山もほの見えて霞める空に月ぞ匂へる。[1]

吉野山わけてこしべの川淀に浪の花さへ匂ふ月影。

十六日、天氣いとよし。朝まだきに宿りを出で、土橋わたれば土田の里なり。それすぎて檜垣本をへて壺坂寺に詣でむと、山かたつきたる道を右りへ取りて行くに、一里に餘れる程、人一

①青柳の云々　青柳のかつらき山もぼつさ美しく見えておぼろ夜の空に月がうるはしくほのめきかゝつてゐるさの意。青柳のかつらさいつてかつらぎ山にかけたのである。次の吉野山の歌は意明かである。

人だにあはず。此處彼處に打ち合せたる雉子(きじ)の聲のみ、山びこどよめていとさびし。

檜垣もと朝こえくればほろゝうつ[1]きゞしより外人影もなし。

畑屋村を通りて、山懷[2]を上り行く。木づたふ樣も珍らかに、谷の戸わたる鶯ののどやかなる、とり／＼に心とまりて、歌もがなと思へど出でこず。分け登る山の手向[3]を赤尾とかいひて、吉野の郡もこゝ限りなりとぞ。顧りみすれば、みよし野の山も里も見渡され、北の方には畝火山、耳なしの山も見えそめたり。忠よし

①ほろゝうつ　雉子がほろほろと鳴きながら羽ばたきをすること。古語。

②山ぶところ　山に圍まれて風のあたらぬ所。

③手向　頂上。

『こゝまでは[1]顧みつゝも吉野山いつかはよそに立ち別れなむ。』『たむけより國見をすれば、畝火山、耳梨山もさやに見えたり。』うたひつゞけてやゝ下れば山吹の花こゝら咲きみちて、うるはしかりけるに、『山吹の盛りの色に[2]赤尾てふ名はかくれたる此のたむけかな。』と同じ人は口ずさみつゝ、坂道を下りつきたる所、やがて壺坂の觀世音なり。先づ詣づ。奥の院とて、五百羅漢三千佛なんど立ちつらなりて、珍らしき岩山ありときゝて、自らなる石のなれるまゝにて古き神の御かたなんどにもや、ゆかしと思ひて

①こゝまでは、手向けよりの二歌の意は明かであるさやには明亮に、はつきりと。

②山吹の云々　山吹はかばかり盛りにうるはしいから其所の名も高かるべき筈であるのに、さはなくて名はあらはれずかくれたり。といふのである。

行きて見るに、あらぬ作り物にてぞありける。觀音堂よりこゝまでは、三町とかいひしも、五六町やあるらむ、益なきことに足疲らしけることよと呟きつゝ、ことにぐには見もめぐらでかへり出でぬ。谷陰の道を下り、清水谷の里を過ぎ土佐の町に出づ。こは高取の城の麓にて、よろしき程の屋どもあり。それ離るれば、やがて大和の國中なり。そもぐこの度の旅路よ。曇り日にわぎへを立ち、ひまなく降れる雨をしのぎて、山のたをりを打ちこえつゝ、花見ありきし頃ほひより晴れ初めにたれど、行き返る雨雲は

猶もこゝたに[1]山のまにたなびきたりしが、けふなむ殘りなく霽れ渡り、珍らしくのどけくて、此處や彼處と見所多かる中にも、妻爭ひせし二つの山は、眞近くて物にもまがはず。天の香具山はやゝへなりて[2]見ゆ。直向ふ生駒が嶽は、雲のはたてに立ち聳え、西はかつらき・二上山、東は多武・倉梯・初瀨なむど、霞の奧につらなりて、三輪の神山しゞに生ひたる松の緑りもこまやかにておとつひの雨に、眞近くてだに見え分たざりしにはやう變りて、いとめでたし。

爭ひし[3]畝火耳梨一つらの霞につゝむ春のゝ

①こゝたに　許多に。

②へなる　隔る。距るに同じ。

③爭ひし　さ旅衣の二歌の意明かである。

どけさ。
旅衣はるの霞も空にみつ大和國原見れどあかぬかも。
くちずさみつゝ平田村を過ぎ、見瀨にかゝる。此の里の東に陵あり。大御おくつきとおぼしくて上つべなる岡は、丸く平らなる芝原なり。なからより下は皆はたにすかれたるなむ、いと悲し。里の翁呼びすゑて、何れの御なりやと尋ぬるに、これなむ藤原の宮に天の下しろしめしゝ持統天皇なりと申す。いかにやあるらむ。ついであらむ折にこそ委しくは考ふべけれ。

①旅衣はる　張るさ春さたかれたのである。

菅笠日記に、飛鳥わたりより西ざまに向ひて、豊浦・和田・石川なんどといふ村々を經て、大輕村よりこゝに物して、やゝ高き所なる道の南に、倚高くまろに見ゆる岡あり。其の南の面に塚穴あり云々とて、宣化天皇の身狹の桃つ花き鳥坂の上の御陵なんどにはあらぬにや。此の岡の下はやがて三瀨村といふ所なり、としるせるは、この御陵の御事とぞおぼし。されどかくては、其岡の姿も慥かならぬ様なり。こたび、わが見瀨の里の南より見つゝ來て、里なか通りて、又北より見しに、いづこよりも紛ふべくもあらぬ、御車

形の岡にして、南の方の丸く平らなる所は高く北へながく築き出したるはやゝ低し。畠にこそなりにたれ。其の樣はいとも定かに見奉らるゝに、しか記さざりつるはいかにぞや。さばれ是を措きて、外には此見瀨の里近くに御陵はあらず。思ふにやゝ高き所なる道といへる、やがて此のみさゝきの中らにてやありけむ。よりて道の南に尙高く見ゆる岡とは記しけむ。よしや東より來れりとも、大凡の姿を遠くより見つゝ物すべきに、たとへ御陵のなからに道はありとも、たゞにやゝ高き所とのみ記すべきや

うはあらず。いとも〳〵訝しきことにこそ。

やゝ行けば、畝火山いと近くて、麓には、橿原の宮に天の下しろしめしゝよりこのかた、四代の帝の御陵神功皇后を齋きまつりし宮なんどもおはします。道の邊りにしるべの石立てて、しか〳〵彫り付けたり。詣でまほしかりしかど、行先急ぐ程なれば、思ひ止まりぬ。返す〳〵も、壺坂詣をやめて、土田より直ちに土佐を經て畝傍の麓に道して、あがれりし御代々々の、大宮所や御陵なんど尋ね奉りなば、古へ學びのたづき[1]にもなりなむものを、よしなき壺坂にひまとりて

①たづき　手著。便り。

ここをしも徒らに過ぎ行くなむ、可惜しき事にはありける。御坊・大さじまなんどいへる所通りて、八木の里にしばし休らふ。今日の暖かなる、袷衣もうるさしと、一重にぬぎかへつつ、九品寺、田原本・八尾尻なんど過ぎて、うち橋渡れば、八尾村なり。ここに道しるべとて建てたる石はこぞの春、[1]御蔭参とて賑はへる頃にや設けたりけむとおぼしくて、『天照らす神の御蔭を笠にきて杖つきたてる道しるべ石。』てふ歌彫りつけたり。誰人のにや、折にあひて宜しと見ゆ。今里・王子・から子・嘉幡・二階堂打わたり、藤川てふ

①御蔭参　伊勢の内外宮へ國中こぞりてひきつゞき參ること。

村にやすらひて、忠よしがやや後れしを待ちつつも、何くれと打ち語らひ、又[1]先だちてここを出で、横田・井殿わたり過ぐる頃は日影も既に傾きぬ。折しも北風烈しく吹きて、俄かに寒くぞなりにたる。かからむとしも思はで、晝の暖かなるに心ゆるび、身の輕らかなるぞ、道のながても辿り易からむにとこそははからひたれ。今はなれたる一重の衣の、いかに堪ふべきやうもあらず。袷の限りは、供なるをのこに持たせて、忠よしが[2]倶したれば、ここにのみ立ち休らひて、夕風に吹き惱まされむよりは、あなたの里に家も

①先だちて　忠孝が來るを待ちつけで先だちて藤川を出たのである。

②倶したれば　忠孝が從へてゐるから。

あんなれば、入りてこそ待ちつけめと、吉迪と言ひ合せて、いよよ道を急ぎつつ、北の瀬てふ里なる、某の屋に尻うたげ[1]して、やや久しく程は經ぬれど、いかにやしけむ、忠孝は影だに見えず。打ち驚かれて、吉迪は今來し道を十町ばかりも立ち歸りて尋ねれども、かつて知れず。こはゆくりなき[2]事にぞありける。兎やせまし、かくやせまし、と取るものも取りあへずて惑ひ居るに、春の日もはや黄昏にせまりわたり、かくてはいかで逢ふ事を得べきなんど語らふ[3]に、そばなる奈良人のいへるには、井殿わたりより此方に、紛ふ

①しりうたげ　尻踞げして尻掛けて。

②ゆくりなき　思ひがけなき。

③語らふ　語るの延。

べき道もあらず。さはいへかばかり後れ給へるには、故こそあらめ。若しくは井殿の堤を東に物して、帶解[1]ざまへや行き給ふらむ。さらむにつけては、戌過る頃ならでは、奈良には至り難し。さはさりながらこゝに待ち給ふらむに、一時ばかりも過ぎたんなれば、かしこには、却りて先き立ちて宿りに着き給ひなむも知るべからず。郡山は方角違へり。よも彼方には物し給ふまじ、とまれ角まれ日も暮れなむに、爰より奈良へ半里には猶遠し。道のちまたに思ひ煩ひ給はむよりは、宿り定めて計らひ給はゞ宜しき

①帶解　奈良の近くにある所の名。帶解の方へでも行かれたのであらうさ奈良人が云ふたのである。

た計りもありなむ。　我も奈良へ歸るなれば、近き道案内(みちしるべ)して伴ひ參らせむ。　いざさせ給へと勸むるにぞ、心ならずも打ち連れ行く。　奈良近くなりぬれば、旅の宿りすすめにとて出迎へるをのこあへり。　それがいへるは、先つ方大安寺わたりの道へ、下すをのこに旅籠(はたご)になはせて行く人ありし。　御[1]事達の友なる人にやおはすらむといふにぞ。　かの奈良人もう[2]べなひて、さらば井殿より小道を北襟へ取りて大安寺邊(わた)り物し給へるにてやあるらむ。　然らむにはいと早く奈良に至りつきてはおはさむなんどいふ。

①御事達　君たちといふ程の意。
②うべなひて　諾ひて。うなづいて、分つたのである。

とり〴〵に賴もしと打ち聞きて、暮れ果ててぞ奈良にはつきにたる。　折しも旅人あまた來集ひて、いづこの屋もみち〳〵たれば、君ら遲しとあ[1]ざみつつ入れたてぬぞわ[2]びしきや。　辛うじて宿り求めて、隣りわたりに人走らせ、さる人々や宿らざると問はすれど、知るべくもあらず。　湯あび物くひなんどして、夜もややく[3]だちにたり。　寒さは寒し。　厚[4]衾(ぶすま)打ちかさねて、引きかゞぶる物から、今日の騷ぎに、い[5]もやられず。　夜ひと夜心地惱ましくなむ。
十七日、起き出でたれど物のみ思はれて、とや

①あざみ　ここは輕しめつゝといふ程の意。
②わびしきや　なやましいことである。困つたのである。
③くだつ　夜もだん〳〵ふけていつたこと。
④厚ぶすま　綿の澤山はいつた夜具。
⑤いもやられず　いは寢。寢もやられず。

角とためらふ程に、日影もたけぬ。今は立ち出でて道のちまたに待ち試みむなんどいひつつ外の方を見出したる折も違へず、忠孝は供なるをのこ引きつれてここを過ぐ。逸早く呼び止めて、迎へ入れたる喜ばしさ又譬ふ可き物ぞなき。かたみに兎ありし角ありしと、語らひ續くるに、昨日の朝の道すがら[1]、直ちに行かば郡山にや出でぬらむ。さあらば西の京に程近し。古き寺々見廻りもて奈良へは物しなむと、言ひ合へりしかど、思ふに違ひて、郡山は道の左りの後樣に隔たりぬるにぞ、我が輩は心もつかで、ひた

①道すがら　道を歩きながら。

すらに奈良の方には物せしなりけり。忠孝は後れ來つつも、先きなる二人がひた急ぎ急げるは、早く西の京見むとての仕業ならむと思ひ取りて、殊更に道をまげて、郡山に至りて尋ねしかど、しるべきよしのいかでかあらむ。されど日ははや暮れぬ。道には甚く疲れにたり。力無くて宿り取りて、朝夙く立ちてここに物する。道の片方に數多しをりして、其の跡にさへ心殘りて來にけりとぞいふ。さる事とも知らで、此方にのみ物せしは、嘸かし心無しとや恨むらむなんど、言ひ慰むるに、『春日野のしかと知りせ

①春日野の云々　然さ知りてあらば膝折りふせても尋ねこむものをといふ意

ばししじもの膝折りてしも尋ね來ましを。』となむいでたる。　彼方にても寒き夜すがらいもやらで、『我背子[1]らうすき衣をかたしきて今宵いづくの里にいぬらむ。』なんど口號みてありしとなむ。　かくて打ち連れ立ち出でて、猿澤池の邊りより、興福寺の内を通りて春日社に詣で若宮・水屋・八幡の宮なんど拜がみつゝ、若草山の麓を過ぎ、二月堂・大佛殿わたり、殘りなく見巡るに、花の木もあまたあれど、いづこなるも皆散り果てたり。　手掻街の某の屋に入りて、しばし休らふに、午[2]の貝吹く程にぞなりにたる。　かから

①せこ　兄子。もと女が男を親しみいふ語であるが、ここは只親しみてせ（兄の君たち）といふ程の意。

②午の貝吹く　ひる時の貝吹く。

むには、今日の日に、我が住む方に歸りつかむ事いかにやあらむと、道を早めて、奈良坂や、兒手柏の、再びとだに顧りみせず、ひた走りに走りつつ山城の國なる、梅谷村より、加茂・笠置・大川原打ち越えて島ケ原の驛に至りし程、日も山の端に入らむとす。　又もふりくる雨にぬれて、船さし渡り、急ぎに急ぎて三本松と云へる邊り過ぐる頃にぞ暮れ果てたる。　夕闇のたづ〳〵[1]しきに、やすからぬ山路ふみなづみて、戌の時下る頃ほひになむ、恙もなくて歸り着きぬ、と思へりしは、のどやかなる春の日蔭に浮れ出でて、村肝の心を

①たづ〳〵しきに　たどたどしきに。夕やみに足元おぼつかなきころ、やすからぬ山路ふみさゝこほつて戌のさき下る頃ほひに辛　じてかへりついたといふのである。

花におきつもの、名張の里なるしるべの方にうまいせし、ひと夜ふた夜の夢なりけり。
同じ年のさつき末つ方にしるし畢りぬ。

行　簡

出版になるまでのあらまし

一

抑々芭蕉翁の文學については既に研究を了つた部分もあり、又現に研究しつゝある部分もあつて兎に角世人の手が着けられて居るけれども、未だ翁の人物研究といふ事に就ては、今日迄何等聞いて居らぬのである。

さらばその資料は無いのであるかといふに、何處にでも澤山ある。特に生國よりも他國に多い。それもその筈で何分翁の人物が偉大であつたからである。從つてあの樣な偉大な文學、偉大な文格を生じたのである。そこが『文は人なり』とも昔からいはれてゐる譯合のもので何うしても文にはその人の人格の全幅があらはれる。その作者の内部生活の自己があらはれる。何といつてもこれは爭はれぬ事實である。

然れば翁の人物資料が澤山あるのも無理はなからうと思ふ。然るに是迄誰も手を着けないといふのはそこに深い譯が無くてはならぬ。何ぞや。全體人物研究といふものは第一已れの目が明いて居らねばならぬ。已れの目が明き盲であれば如何に結構な資料が眼前に山積してあつても見えぬのである。又

大きいものを心の内に蓄へたものでなければ共鳴も出來ず認識も出來ず同情も出來ぬものである。傳記を詐り無い袖は振れぬのである。有れば必ず溢れるものである。故に苟くも、偉人を偉人として傳記を作つて世に押し出さうとする時には先づ筆者をえらばずばなるまい。必ずや内に大なるものを蓄ふるものに非ずんば偉人として傳する事は出來まい。若し凡の凡、平の平、濁の濁、狹の狹、偏の偏、妬の妬たる者が傳したならば必ずやその傳せられたる人物は凡の凡、にあらずんば平の平、平の平に非ずんば濁の濁、濁の濁に非ずんば狹の狹、若くは偏の偏、若くは妬の妬となつてしまふであらう。萬が一的確なる資料があつて資料本位に傳せられたりごも其の資料は生きて居ないのに相違ない。して見れば何うしても偉人を傳するのには内に大なるものを有する作者を以てしなければなるまい。

現にジヨンラスキンの有する偉いなるものは偶々ターナーの偉にあひて激せられて大文字ごなりて爲に兩人の名今に天下に謳はれてゐる。又韓退之は柳子厚の偉大なる事蹟に感じて有名なる墓誌銘となり、其他王安石の歐陽修に於ける、樗牛の日蓮に於ける、皆偉にあひて偉があらはれたのである。特に人物のみならず勝景に於ても亦然りである。蘇東坡の赤壁に於ける、山陽の耶馬溪に於ける、拙堂の月瀨に於ける皆然りである。併しさういふ人は其の時代に於て中々稀有の人であらう。縱しあつた所で世の中が世の中だから或時は馬鹿にされたり或時は妬まれたり又或時は惡まれたりもしよう。是が妻子眷屬のある身の上にはとても怺へ切れないであらう。依て悟つた人は不得要領で暮したり、

韜晦主義を取つたりして存在をけむにしてしまうであらう。固より然あるべきである。して見ればさういふ人の出現を俟つてゐた處でそは寔に迂遠な事ではないか。加之資料といふものは生きてゐる人の手にあるのだから、いつ何時散佚したり湮滅したり破棄されたりしてしまうかも分らぬのである。かう思ふてくると今は一刻も猶豫の出來ぬ樣な氣がしてきて、竟に不肖ながら自分から進んでこの度翁の人物研究に手を着けた迄のものである。決して人のお株を奪ばうなどといふ樣なさもじい心からでも無く、又苟くも先進を凌がう脅迫しようなどといふ樣な不了見からでも無い、一體研究と云ふものはそんな此處が誰の領分彼處か誰の領分などと繩張爭ひをすべき性質のものではない。又そんな風の遠慮をすべきものでも無い。唯誰人たりごも一意專心斯の學の爲、斯の道の爲、斯の文の爲、斯の國の爲に研究貢獻すべきであると信ずる。實際微力ながら御國や時代を思ふの急なるよりして餘計な事は顧みる遑は無いのである。是に就いて此の中迄弘前の高等學校長であつた黑金泰信文學士が嘗て余に語られた事がある。曰く『世の瑣々者流が彼是いふたとてそんな事を氣にするやうな事ではいかぬ。研究は直進すべきである。』と。

又先年黑板勝美博士が富山縣廳前の富山館内で余が拙稿『足代弘訓』を一閱せられた時にも『研究は無盡藏であり所有主といふは無い。猛進すべきである。が併し時代が時代だから苟しくも文筆ある者は大衆を善導すべき作品を著はすが現下の最大急務である。』との趣旨で我等を大に激勵せられた

事がある。

二

かくてその後余は芭蕉翁の人物資蒐料集のため諸方をあさり歩くうち、前きに上野圖書館で見附けた所の寫本は即ち本書で換言すればこれは芭蕉翁の人物研究の副産物である。

尤も副産物については此の外俳人虚白、蟬吟子、藤堂新七郎良勝等の各事蹟がある。先年の『足代弘訓』著作の際の事を思ふと副産物は此の度も少くとも二三十部位には上る事であらう。

偖余は同館で同寫本を見るや、先づ其内容と形式の優秀であるのに驚いて直ちに『一體此の作品は何時頃誰の手に成つたものか』と聞いて見たが分らぬ。依て已むを得ず少し許り讀んで見ると、文中に『藤原行简』とあり且つ『天つ御空も保らけき大御代の二年』とあるによつて其作者の本名と年代とが分つた。そこで余は喜んで『この作者は藤原行简といふ人で天保時代の人であることが分つたがこの人は何處の人で如何なる身分の人か御存じないか』と又尋ねて見たが相變らず一向分らぬ。勿論その文學上の價値などは少しも認めてゐない。之を遺憾に思つて余は又々『私の見た所によるとこれは德川天保時代の鈴門國學者連の作品と並べて何等遜色の無い作品である。これ程の作品が何ういふ譯で今日まで世には見はれ無かつたのであらう。』と言ふて見ると、『今日まで此の作品に對しては誰も然ういふ事を荀且にも言ふた人が無い。』との事であつた。餘りの事に心は苛立つたがすぎ去つた事は今更何うとも仕様が無いので兎に角寫し取つて置かうと取り敢へず借り出して其夜から夜は寢もしないで幾夜もかゝつて遂に寫し取つて下へ注解をも書き入れて一冊にした、その後之を彼方此方へ持ち廻つて見せたが、誰一人之に對しその作品の地位、價値を認める者は無かつた。中には本居宣長の菅笠日記を見せてさへが、何等優秀なる作品であるとは評定しなかつた。これは以前某中學に居た頃或人に當代第一人者の漢作品を余が作品なりといひしに引直し、余が作品を當代一流の漢作品であるといひしに恐れて引直し得なかつたと同じであると思つて苦々しかつた。

三

人が何と言はうとも私はどこまでも然く本書の價値を信ずるのであるから尙もこりずまに人々に聞き合せもし、又此方から態々宣傳する事にもつとめたが、何分行简の閱歷が更に分明ならぬので何かにつけ不都合である。依て已むを得ず上野の各新聞に作品のあらましと自已の所見とを記して弘く世間にも問ひ、且つ上野中學の生徒にも一々賴んで見た。すると新聞や多人數といふ者の威力はひどいもので、しばらくの間に萬町の澤家のを始め所々方々から數多の資料が集つて來た。余が尊敬して常に出入して居る上野町の篤學家村治圓次郎氏から左の如き手翰に接したのも其の頃の事であつた。

拝敬　春寒料峭の砌愈々御佳安奉賀上候
候昨夕豚兒より聞及候へば先生には中矢行簡先生の事蹟御取調之よし拙宅に有之候入交省齋先生の櫻井茶話中には我友中矢行簡又は治郎右衞門のいひけるはとていろ〳〵書認しもの有之申候筆蹟をと探し候得共無之中矢行正てふ短冊二葉ほど有之中々の名筆に御座候右御知らせ申上度草々

三月初五日　　園次郎

榊原先生研北

その後上の町は鍛治町なる同氏の本邸へ行つて色々と史學上の話をも聞き又色々と資料をも得て歸つて來た。但し同氏から得た資料はたゞに這般の行簡資料のみでは無い。芭蕉翁人物資料なども數多與へられた。どうも研究家とかいふものの中には嫉妬心の深い者や猜忌心の强い者や人の功を奪ふ者があるやうに思ふ（若越縣友所載）けれども之を前きにしては足代弘訓の研究をした時伊勢は多氣郡相可村の大西源一といふ考古學の先生、之を現在にしては此の村治氏。この二人の如きは、さるさもじい心は微塵も無く、實に學界稀有の人で敬仰惜く能はざるの人である。一例を擧ぐれば不審の點を問ひに行けば少しも挾む事無くして蘊蓄を傾けていと丁寧親切に語り聞かせられ、又資料の如きも余が研究に關する分は惜氣も無く全部を與へられ、又他家所藏の分にても見附かるに從つて其家主に之を余に送らん事をすゝめ又は直接その在所を速報せられる。此の二人の人達は唯一途に斯の學の爲、斯の道の爲、斯の御國の爲といふ事を思ふの急なるのみで、勿論人が美名を濟さうか濟すまいか、又人が己れの領分を侵すだらうか、侵さぬだらうか、又は壓迫を加へるだらうか、加へないであらうかといふ樣なそんな事に就いては毛頭詮議立ては無いのである、さうで無くては斯ういふ風な虛心平氣的な態度は取り得ぬ者である。所謂『人生意氣に感ず』で史學家でも教育家でも、國民道德家でも歌人でも著述家でも苟くも先進といはれる者がかういふ風な仕振であらば甚大なる感動を後進に與ふるものである。しかるに、第一流ともいはれる博士、學者の中にはこゝに其の名と其の事とを記さないが、後進に對して考への無い人もある。時代といふこと、國家といふこと、斯道、斯學、斯地といふ考がない人が慥かにある。かういふ人々は、思想惡化などについては多少共責任があるといはねばならぬ。余輩の如きは未熟な者ではあれど前記二人の方に對してでも此の度の研究は是非大成せねばならぬと當時覺悟した者である。故に資料の如きは決して人の功を私しない盜みはしない。即ち與へられた資料には其出所、氏名などを必ず明記して置いた。さういふ譯であるから余の研究はいつでもスタートを切れば必ず感激に始まり感激から感謝の生活に轉じ報謝の實をあげて終るのである。

四

かうして集まつた資料は一々本文よりも寧ろ其の題目や其の裏面文字などに深き注意を拂つて寫し取つた。果せる哉、其の裏面よりして事蹟は大分明かになつて來たが、尙靴を隔てゝ痒きを搔くの感があつた。故に今度は愈々余が最後の常套手段たる墓あさりと中矢といふ姓の家の戸別訪問とを始めた。戸別訪問はまだよいが此の墓あさりといふ者は中々困難な者である。何となれば、この墓あさりを始めると第一からだがむづかゆくなる。そのつぎにはやがて精神が何うも引立たない何かなしに、うとんとしたからだになる。それを構はずに押しまくると今度は譯の分らぬ病にかゝる。さういふ恐ろしい目にあふのも覺悟で日にち毎日心當りの墓所へ行つては上衣を脱いでしやつ一枚になつて無緣有緣を問はず中矢といふ文字ある墓はないかと念入りに一々調べて行く。それでも唯月日を閲する計りで何等得る所が無かつた。然るに忘れもせぬ昭和三年四月の八日の釋迦降誕日に、偶然伊賀は長田村なる西蓮寺といふ寺へ行つてしかも隨行の長男位にこの墓を發見され先手を打たれた。成程見ると表には藤原行簡墓と誌してあつた。尙其の裏面や側面にも極簡單ながら閱歷上の參考となるものが書いてあつたので、實に此の時程嬉しい時は無かつた。實際嬉しかつた。餘りの嬉しさに思はずおくつきの前なる土の上へ跪づき、頂根突拔き伏しをろがみつゝ、先づ『自分が發見々々といふたのは或る人達の言ふやうに、その所謂發見作品の作者は學界には旣知の人とされて居り、又文學史上にも明記されて居り其の作品も世間に流布されて居るに拘らず、已れのみは始めてそれに接して吃驚して新發見々々々々といふてゐるらしいのとは違つて即ち卿の作品は文學史にも無論載つて居らず從つて學界にも知られて居らず、又其の作品も世に流布されては居らぬ。併し其の作品は慥かに德川天保時代の國學者の作品と並べて毫も軒輊が無い所の內容と形式とを持つてゐるのであるが未だ世に見はれてゐない所のその立派な作品を見つけたのであるから新發見〳〵といふたのである。夫はちやんと新聞にも書いて置いた。夫をも讀まずに世間の人の中には輕率にも嘲辱的態度で笑つてゐるらしい人のあるのは寔に迷惑至極である。』といふ事、次には『卿の閱歷が、不分明である故非常に探討に苦心した』といふ事などを生ける人に言ふが如く搔き口說き、尙最後には、みたまのふゆによりて卿が殘した言葉のすべてを世に著はしうるやうに冥護あれとこひのみて偖は女々しくもあとは淚となつた。折柄香を先き立てゝ何處よりか花びらの散り來て熱き涕に濡るゝ双の手先にとゞまる。この場合豈一首無からざるを得んやである。

みほとけの心の片かちら〳〵と花散り來なりぬるゝ手先に。
けがれざる我が身にのみとめぐまるゝ佛の花と思ひける哉。
長へにめぐまるゝみのあかしをばつ〴〵知れりけふの吉き日に。

この『けがれざる』といふ事については一寸斷つておきたいと思ふ事がある。それは外でもない、余は先年苦心して足代翁の事蹟研究を完成した時に『酒をたち女も見ずと大前に誓ひ祈りて書きそめ

しふみ』と詠んだこともあつたが、此の年元旦に芭蕉翁の人物研究を思ひ立つた時にも下の如き和歌をものしたことがある。『いさたかき心起れりこのゝちを過ぎても行かむ神の如くに』『そのつみはわがみか人か戀をさへ獸の如しとにくむに至る』男といふものは志を立てたならば專一にすべきである。確實にすべきである。それには一切の不正執着と不正ほだしをたつてしまうべきである。かくて大成する所の事がらは始めて眞を得、善を得、美を得べきであると余は深く信ずる。『けがれざる我身にのみとめぐまるゝ佛の花と思ひける哉』佛のみならず神といへども汚れたる心、汚れたる身にはめぐまないに相違ない。

歸路は心も晴々しく久々で頭を上げて四方を眺め渡したりした。途上左の自然風物歌詠一首をも得た。

青やかに沾へる空の大和富士美目盼たり巧笑倩たり。

五

さきに本書及本書の作者の事を新聞に書き現はすや同時に余は京都帝國大學の吉澤義則博士にもいひ送つた。これは敢て先生の指教を請はんが爲であつた。處が其の後同博士から巻頭所載の如き手翰に接した。

依て余はかねて親から寫し取つた寫本を其の儘送呈しようかとも思つたが少し考へる所があつて兎にも角にも活版本となして而して後之を送呈しようといふ事に定め、夫から刊行の事を上野町出身の石塚猪男藏氏（大阪松雲堂主）にいひ送つたのに恰かも好し、氏は當時上野なる玉椿別邸へ來て居られたので余が書面は大阪の本店より同別邸へ轉送され同別邸よりは三月十四日に氏の手翰をもたらし來つた。余は歡喜してその夕同邸へ馳せ參じて氏に初對面し且事の始終をも語つて色々と懇願する所があつた。愛郷の念と尙賢の慮とにあつき氏は營利といふ事を離れて直ちに快諾された。然るに余は其後公務の繁劇と家庭の累礙とにあひ容易に原稿の清書を完了する事が出來なかつたが今や偶々五年生が配屬將校原田大尉に引率せられて久居第三十三聯隊に宿泊し毎日教練の實施兵器の見學等をなす事がある。余は五年の主任の一人であるのでその附添を命ぜられた。原田大尉の細心熟練なる示教ゝ山際、西尾、世古口、松村、前田の各優秀兵の誠意ある指導とに由りて晝は唯天日さられて付添參觀するのみで別に心身過勞といふ程の事は無いから夜に入り（夜間演習のない日は）冷たい金屬寢臺の毛布の中に重藤の弓となれる余は家にある時よりも就寢の時間が長いからでもあるが折々目がさめる事がある。さういふ時はやむを得ずやをら毛布の中をもぐり出てそして蚊と野虫とのうるさく攻めくる中を孤燈影はくらきガラス窓の下でコツ〳〵始める執筆はこの原稿の淸書であつた、かうして一夜二夜と重なりゆくうちには終に完了することが出來たのである。

あゝこの眇たる一小冊子、かゝるものの巻尾にしかもかく長々しい拙文をかゝげるのも實はこれも

唯一圖に斯の鄉、斯の學、斯の道といふことを思ふの急にして他を顧みることのできぬ余り、つい女勢がかくの如くになつたのであるが、今一つは『この國步艱難の秋に當つて國家といふことを忘れて唯徒らに蝸牛角上の濫爭をなし又は酒食遊戲相徵逐し迎合是れ勗め無爲これ銜ふ。偖は實を笑ひ華を稱す。太甚しきに至りては肉體あるのみを知りて精神あるを知らず蠢々然として時をむさぼり年を竊び何等永生の自我といふ事を謀つてゐない』などの譏りを世間から受ける事を屑しとしないから聊か所懷を見はしたのである。詰り天下の殼潰しとか尸位素餐とかいふのを少しでも免れたいといふ心持からである。別に他意はないのである。

時は今みくにゝとりて如何なるなやみのみちにありと思ふか。
一筋にかはらぬふしをいのちにて道あながちの人をまつ時。
その一人その只一人を待ちわぶる世にあらずやと涙は出ずや。
美しく道に殉ずる人はたゞ一人ならずば慰さまゝしを。

昭和三年五月十八日夜二時久居聯隊酒保南方の上野中學五年生宿舍の電燈下にて注解者榊原賴輔之をかく。

昭和三年七月二十日印刷
昭和三年七月二十五日發行

註解夢のたゞか
定價金五拾錢

著作權所有

著作者　中矢直之介
註解者　榊原賴輔
　大阪市東區本町四丁目四番地
發行者　石塚良一
　大阪市西區阿波座二番町五番地
印刷者　堀田助一

發行所　大阪市東區本町四丁目　松雲堂
振替大阪一三六七五番
電話本町九〇八番

317
947

終